

座談会

AACKと山岳部の戦後

日時：1986年9月7日 午前10時半～午後4時

場所：京大楽友会館

出席：西堀栄三郎、中尾佐助、近藤良夫、藤平正夫、池田孝蔵、林一彦、山口克、藤村良、斎藤惇生、平井一正、酒井敏明、岩坪五郎、斎藤清明、吹田啓一郎、伊藤宏範、中山茂樹

岩坪 皆さま、お忙しいところをありがとうございます。今日の会は『AACK50年史』編集の委員会(近藤、酒井、岩坪、斎藤清、伊藤)が呼びました。今年(1986年)の春から斎藤が、『50年史』を書き始めましたが、AACK創立のころは、つい最近、今西錦司さんの家から、『AACK会報』1号から5号までが出てまいりまして、今までAACKの設立が昭和5年だといわれていたのが、昭和6年の5月24日に、ここ楽友会館でAACKの第1回の設立総会を開いた、会長に木原先生がなった、というふうなことがかなり詳しくわかってきました。

ところが、戦中戦後のごたごたした部分、そこからAACK再建、ヒマラヤへ、というふうなところももう一つよくわからない。そこで、その当時の方々にお集まりをいただいて座談会を、ということになりました。

今日おいでくださいます予定は、西堀先生、中尾先生、戦後いわゆる京大山岳部を作った池田さん、藤平さん、林さん、それから三高山岳部の出身の人たち。

昔から例えば泰安さんなんか、「三高だといってあの野郎、山にも登れねえくせに威張りやがって」というふうなことをいってましたが、そのへんのことも。また南朝だ北朝だという話も出てまいります。洗いだらいとあげようというわけではないですけども、全体の流れをくむためにそういうふうなことを、我々は、一応、知ってたほうがよいのではなからうか。歴史というのは、結局、そのときそのときの権力が、自分の今までやってきたことを位置づけするために書く、というわけですけども、だいぶ戦後からの時代も経ちまして、今や、ごたごたしてましたことが、大体、スーッと一本化してきた。その点で、『50年史』を書くというのも非常に適し

た時期ではなからうかと思っておるわけです。

中尾先生は、八高を出て、京大の旅行部に入れ、今西さんらと一緒にあちこち探検に行き、帰ってこられた。そんな立場からも、割合、やや冷ややかに御意見の意見を述べていただけないのではなからうか。近藤先生は、昭和17年に京大入学で、本当は京大旅行部で活躍しているはずなんですけども、そのころの京大旅行部というのが、いろんな高等学校を卒業してきた人々を吸収、一緒にまとめていくというふうなアクティビティーがだいぶ下がっていたのではないかといわれていますね。藤平さんは昭和18年の秋、池田さんは昭和20年の入学で、林さんは昭和20年入学でよろしいんですか？

林 私、富山高等学校を19年卒業になってます。藤平さんは？

藤平 僕は18年卒。

林 僕と1年違い。

藤平 じゃあ、繰り上げてきているんだな。9月に卒業なんだ。

林 あすこらへん、半年のがあるんです。

藤平 私の半年ちょんぎられている。本当は8年なら19年3月卒なんだ。

山口 林さん、17年に入学ちがいますか、富山高校？

林 そう17年 わしは大学は24年卒業だから、京大入学は20年でいいでしょう。

岩坪 それから、藤村さんが23年に京大に入っておられる。山口さんは24年。斎藤Yさんも昭和24年入学、医学部ですから30年卒業。そういう方に集まっていたきました。

ざっとした話は、戦争が始まってややこしくなって、戦後のもたもたしまして、それから山岳部のボックスが焼けたという話なんかもあり、いろいろごたごたいたしまして、それで、結局、アンナプルナ、チョゴリザになって、現在へ移行してくるわけなんですけども、一応、こういうこともあったというのを思い出していただきたい。

それでは、中尾先生から。昭和14年に入学されて16年に卒業ですから、ちょうど戦争が始まったときに卒業される。そのへんから後話をしていただけないでしょう

か？

中尾 それじゃあ最初ですがね、初めにちょっとAACKの年表(『AACK時報3号』1964年5月、『京都大学学士山岳会員の海外活動記録』1980年6月)に追加訂正を。1943年の「森下・中尾、小興安嶺」というのがありますな。その文献の一つ、『岳人』に出した。それから、44年「9月から翌年3月まで今西・梅棹・加藤・中尾、内蒙古(ダルハン)」と書いてある。これの中にね、今西さんと僕と2人でダルハンオーラという山に馬に乗ったまま登頂しているんです。それを、やっぱり、『岳人』に書いてあります。

藤平 拝見させてもらった覚えがあります。

FFとAACK

中尾 私が一番情報があるのは、FF(生物誌研究会)の問題じゃないかと思う。戦前の旅行部の関係者は大勢入っていた。戦後の山岳部のその当事者もおおし、戦後の活動は、まあ大体、FFから始まっている。Fauna and Flora Society。FFは山登り団体じゃないけれど、FFの活動でヒマラヤが始まるわけです。FFをどの程度AACKの年表の中に突っ込むか。FFという団体は、現在開店休業、開店もしていないという状態になっている。もし必要なら、その関係者としては、今は、今西さんがおる。それから梅棹君もおる。FFの内側の関係者は、それから土倉君も一時期深くかかわっている。

斎藤清 一番最初の事務局員ですね。

藤平 そのFFが年表によると、「1950年(昭和25年)誕生」となってますけども、時期はこれでいいんですか？もうちょっと前からあったような気がしたんですが。

斎藤清 西堀さんがインド、ネパールへ行かれる前の年からありますね。あのとき、毎日新聞から金が少しずつ出て、その会計簿が残っているんですよ。だから遅くても1950年の10月10日ぐらいから活動が始まっている。

中尾 それで、FFの資料を全部、なんだったらAACKに保管してもらう手はあると思うんだけどね。

岩坪 もうそれでなかったら保管するところがなくなってしまいますね。

中尾 なくなってしまう。現在、FFの責任者の形になっているのは、北村先生。あすこに何らかの資料はあると思う。今西さんが賛成したら、北村さんのところにある資料をAACKがもらいうけてもいいと思う。必要だったら、その交渉を僕がやります。

岩坪 川喜田さんのお姉さんがそれを実際保管してるわけですよ。

斎藤清 いや、実は、川喜田春子さんについて1週間ほど前に電話でうかがったんです。そしたら、その資料は教

室に残ってるはずとのことです。

中尾 とにかく、FFの最後の会長の北村さんが、それをAACKに渡そうということに了解すりゃ、AACKがもらえることになる。

AACKとFFの関係というとFFの話からしようか。あのヒマラヤ計画に伴って、FFができたんですがね、その前身がなかったかということ、あることはあった。人文科学研究所の中に。

斎藤清 藤枝晃さんですね。

中尾 藤枝さんが事務局長だった自然史学会。大体、戦争中の大陸での活動を中心にして、自然史学会の本を今西さんが書き、梅棹君も書き、私も書いた。これは年1回で数冊の出版で終わりにになりました。

酒井 『自然と文化』という題ですね。

岩坪 それと探検地理学会というのは何かありますか？

中尾 それは戦前の話になるな。探検地理学会ができたのは、戦争中の昭和14年。つまり、13年に内蒙古の木原探検隊があった。これには今西さん、鈴木信ら大勢、旅行部関係の人が入っています。それから帰った後、さらに探検を促進しようとして、探検地理学会を作った。ポナベ島は、確か、探検地理学会の企画の形になっている。今西さん隊長で、僕も参加している。

その流れは、戦後になって伊藤洋平が、「講和条約が調印されるから、また、ヒマラヤをやろうじゃないか」といい出したのが発端で、最初は梅棹、洋平、私とたぶんその3人だったと思うがな。それに毎日の京大の記者を連れて、木原先生のとこへ、「ヒマラヤ計画をやるかと思うが」と話をした。まあそれが、マナスル計画になり、毎日新聞社が後援になっていくわけです。いろいろと経緯はあるけれども。そしてヒマラヤにどういうふうに進んだかというのは、この徳岡君の本(『ヒマラヤ—日本人の記録』毎日新聞社、1964年)にかなり入念に書いてある。その話は、大体、僕がしゃべったんですよ。

斎藤清 そうですか。

中尾 ところがね、もう一つAACKとFFの関係で大きいのは、カラコルムヒンズークシ探検隊がある。これは戦前の伊藤憲、K2の計画がずっと尾を引いている。そのときももちろん木原さんが……。

斎藤清 隊長の予定。

中尾 ここで、今西さんと木原さんの関係という、部外秘かもしれんけど、どんなもんであったかという、エピソードがあります。それは今西さんは京都駅のプラットホームで木原先生に土下座して謝ったこと。FFでヒマラヤ計画を進めている途中でね、今西さんがある席で大変ご機嫌を損じた。今のところ、木原先生は死んだ

ど、今西さんは生きておる。ちょっとはばかりある話だけど、今西さんはそのとき京都駅のプラットホームで土下座して、そして木原先生に謝った。その光景は、お供をしとった望月明さんから私は聞いた。周りの人が不思議そうに、「どうして今西さんみたいな人がこんなところで土下座するんだろう」と。でも今西さんはね、「なに土下座なんかしても、後はパタパタと払えば終わりだよ。これでヒマラヤへ行けると思えば安いもんだ」と。

林 中尾さんは、もういっぺん今西さんの土下座を見えますよ。
中尾 今西さんは、木原先生が教授になったとき、教室は違うけれど、同じ農林生物学科の子弟の関係にあった。つまり、土下座が2人の関係がどうい関係であるかということが、実に象徴的に出てる。それをまあ一つ、そのころの事情として処理してください。

岩坪 酒戸弥二郎さんが、AACKの会員になったとき、「木原先生が、『桑原君、西堀君、今西のヤツ』といわはった」というてた。

中尾 「今西のヤツ」という式だった。しかし、木原先生は今西さんをよく認めとった。

岩坪 それを聞くと、林さんとザッカスみたいな関係やな。

中尾 今いったように、木原先生が、結局、全部の登山探検グループの大ボスであった。一方、木原先生は、自分の小麦の研究からパンコムギの先祖探しという戦前からの企画があった。イランにあるだろうという見通しのもとで、イランの植物探検の計画、そのときも既に毎日新聞社に話が通じていた。毎日新聞社は石川欣一という人が木原先生と非常に近い関係にあった。

斎藤清 モースの本なんか訳していますね。

中尾 イラン探検は、具体的には、もう毎日新聞社後援が内諾できておったようなもの。そして、戦争中にその準備が始まり、飛行機、自動車を使う空地連絡無線の演習をAACKが下請けでやった。AACKではなく、旅行部か。それが、「富士山の空地連絡」として、『山岳』に出ている。

岩坪 クウチ？

中尾 「空」と「地」。その無線はどんなものかという、使ったものは波長5メートルくらいの、今のテレビの電波。ドングリ型の小さい真空管が出てきて、珍しくてね。当時としては非常に最新式だった。そんなものを使って空地連絡をやった。冬の樺太行は行きがかり上、毎日の石川さんが最後になにがしかの金を出してくれた。そして、再び、無線連絡の犬ぞりの上に無線機を置いてそういうことをやった。それが続いてくるのもカラコルムヒンズークシ探検隊なんだ。

ネパールが、大体、1952年、53年の2回で成果の目星がついて、次は、一つはマナスルはうっかり日本山岳会にやってしまったから世界第2のK2を京大の手によってという前からの行きがかりと、それから、木原先生の小麦の起源。ところがね、カラコルムに入るころには戦争中にパンコムギの親の一つ、タルホコムギがもうわかっていた。ところが、そのいろんな変種だとか、分布地域だとか、いろんな生態的な問題が残された。それを前のイラン探検のときの執念にしたがって、再びやろうと。京都の日本新薬の鈴木紀君、これは木原教室の出身です。あすこの当時の主力薬品のサントニンの原料植物、ミブヨモギをパキスタンに採集に行った。それが1952年です。そして持ち帰ってきたのから、タルホコムギがパキスタンの西北にもあるということがわかった。そこで、カラコルムヒンズークシ探検隊はだね、まあそのとき、山のウエイトをどれだけにするか、探検、生物、学術調査をどれだけにするか、大議論がある。AACKと猛然ともめた。そのとき、AACK側の当事者がここにいる林君です。覚えがあるか？カラコルムヒンズークシ探検隊の前の企画段階のAACKとFFがもめて喧嘩状態になった。

林 それは、鈴木信と一緒にあったときの会合じゃないですか？

山口 「京園」でやったんちがいますか？

岩坪 それいうときには、鈴木さん、その上の四手井さんやらが山登り派の応援をしはって、今西一家と喧嘩するわけでしょう？

中尾 そこんとこはね、僕はその会合にほとんど顔を出しておらんすね。結局、FFは、AACKと登山を切り捨てて北部の水河地帯の偵察だけをやることになった。そうして、パキスタンのカラチを出発点にして、木原さんが、パキスタンの西北部のまざタルホコムギの位置関係、東端をおさえ、アフガニスタンに入り、イランへと調査計画が。片一方の水河隊は、カラチからカラコルムに入るという2つのプランができた。鈴木君のタルホコムギ発見からです。四輪駆動車2台をトヨタに頼んで、それがトヨタが応じてくれて、そしてスカッとカラコルムヒンズークシ探検隊の全計画が成り立った。カラチを出発点とする全計画が。英文の報告書があるな。

岩坪 8巻。

中尾 ネパールの場合は3巻。

岩坪 今ので中尾先生の場合、さっと1955年までいきましたけど、そのネパールの3巻、学術隊で中尾さんと川喜田さんが行かれる。そこんところは、そういういざごなしでスッと行かしたのはたんですか？

中尾 これはね、まあ、アンヒビアン、両生類という立

場。まあ、僕は登山家として、俺は登山家だ、という顔はあんまりしておらんつもりだけど、いくらかは登れるというぐらいいいこと。しかし、ネパールで好きなこともやって、その結果がああいうふうになった。

山口 ネパールのいざごなしというのはないでしょう。対JACに対する問題でしょう。

中尾 JACに渡したのはね、僕の記憶では西堀さんだ。西堀さんは自分でネパールへ入って交渉した。ところが、FFの名前を使っても誰も相手にしてくれんという。

斎藤清 ネパール側がですか？

中尾 ネパールやその他の関係者が、数か月前に作った私的な小さな団体の名前では、どうも権威がなくて交渉が非常に難儀だった。これはやっぱり、日本山岳会の名前を借りるべきだろうとなる。西堀さんの、日本山岳会に登山は譲ろうという発案で、東京の会議は僕も同道していった。日銀の中だった。

斎藤清 JACに譲り渡すとき。

中尾 日銀のね、JACの理事、藤島さんだったかなあ。日銀の奥まった部屋に入ると、そこで登山計画を譲り渡した。西堀さんがカトマンズに滞在中に大急ぎで作った登山のアプリケーションを出しておいてね、それがすぐ通って許可が来るとは思わなかったんだよ。それが、今のマナスルを譲り渡しの交渉が済んだ後に京都大学へ来たんだがね、学内でしばらく止まっとった。FFという名前が学内でもわからなかった。「こら、なんの手紙だろう」ということで。それがやと届いて、どれくらい止まっておったか僕もよく知らんけど、ああしまったということになった。

藤平 僕がああ当時、西堀さんから聞いたのによると、ネパール当局者というのは、イギリスならAlpine Clubがあり、アメリカならAmerican Alpine Clubだといったものしか知らなかった。だから、日本なら大学の名前を出しても全然わからずにJapan Alpine Clubだという認識しかないんで、どうしても日本山岳会という名前で作るほうがいい、というのが僕が西堀さんからその当時直接聞いたわけですがね。

斎藤清 いわゆるナショナルチームのような形という？

藤平 いやいや、向こうの山岳会に対する認識は、その程度だったということなんだ。どこにもここにもあるとは思ってないからなんだね。国家的に代表しているものだけしか頭にないわけね。

京大山岳部の発足

岩坪 そのへんはご本人がやってこられますので……。では、池田さんは、午前中でお帰りになるので、池田さんが山岳部、京都大学にお入りになったころの状態とい

うふうなことを先にうかがうのをお願いしたほうがいいと思いますけど。20年に入られるわけですね。そのときには、藤平さんは18年の秋ですから……。

池田 おらへんな。学校におらなんだ。

藤平 ちょっといきさつ話しますとね、18年の9月に入って、10月か11月、ともかく12月が学徒出陣、その前だったと思うんですが、私、京都の一緒の下宿に旧制富山高の山岳部の先輩がおった。斎藤さんという、今、大建工業の社長です。で、斎藤さんに京大の旅行部に入りたいんだけど、どうしたらいいんだろうというたら、「うん、旅行部というのは、わけがわからんようになっちゃった。なにしろ残っているのはスキー班、ハイキング班、それからハイキングのほか、例えば鴨川でホテルを見る会とか、そんなようなのがあって、ともかく、その連中集まっているから来いよ」というんで、僕は旅行部のコンパと聞いて出ていったんですよ。ここ（楽友会館）であった。そのときのスキー班のキャプテンが有光弘さん、今、どっか大きな会社の社長さんですわ。

山口 住友軽金属工業の社長。

藤平 あの人なんです。その前の春に斎藤さんと立山へ来てたことがあるんです。私、ちょうどウロウロしておったもんですから一緒にノ越、竜王の東尾根を登ったんですよ。私はずっとリードして上がって、有光さんも一緒に登った。有光さんは、本来はスキーなんです。で、有光さんもおるからというので出てって、自己紹介やっといういろいろ話しておいたら、スキーのレースの話ばかりなんです。神鍋の大会でどうだったとか。これは、全然違ったところへ来たなと思った。これは深入りせんうちに逃げたほうがよからうということ、たまさか、やっぱり旧制富山高のOBで南という人がおったんです。実は、私の義理の兄貴。高等学校は3年か4年上だったんだけど、落第を重ねてきて、大学3つめだったかなあ。京大で一緒になった。南さんと一緒に、じゃ行こうかというって行ったらそんなことでしょう。で、僕は、こいつは深入りしちゃうかん、早く逃げなきゃと思って立ち上がってね、「どうも、全然場違いで来たような気がする。私はスキーのレースなんてのは全く興味がないんで、いわゆる伝統ある京大旅行部、山ということについて慣れて来たんで、どうもこれは、ここにおってもしょうがない。これで失礼する」と立ち上がって帰ったんですよ。そしたら、有光さんと斎藤さんは大慌てで、「待て待て待て」というんだけど振り切って帰っちゃった。南さんも一緒にトコトコ出てきて、この近衛通を百万遍へ向かって歩いてきた。晩8時ごろだったと思う。まだ暗かった。2人でくだらんことになったなといういなから歩いてきたら、後ろからバタバタと追っ

かけてきたのが一人おって、「いや俺も同感だ。俺も席を蹴って出てきた」と。「京大旅行部、京大の山の伝統というのは、一体、どこへ消えたんだろう」と嘆くのがいる。それが伊藤洋平なんです。洋平に、戦前会ったのはその1日だけなんです。僕は、それからすぐ翌年、兵隊に行ったから。

中尾 ちょっとそこで、そのころ、僕は旅行部だったんだけど、戦争中で忙しくなった、いろんな意味で。海外へ出たわけです。モンゴルとか満州とか。

藤平 主力メンバーいないんですよ。

中尾 でね、旅行部そのものはね、面倒みずにはっぱなししていく。

山口 いや、そのへんどこ、この前、三高の山岳部の内輪の集まりがあって、ちょっと旅行部の話が出た。そのときの吉良さんの話では、「旅行部というのは、大体、海外遠征を目的とした集まりである。ところが、戦争の情勢で、学生が海外に登山とか、遠征に行くというのは禁止された。そこで旅行部があっても意味がない」と、吉良さんのいうてはったんでは、「昭和17年に旅行部は解散した」と。それ、近藤さん来られてからもう一回確かめてほしいんですけどね。

斎藤清 近藤先生は、旅行部に入っていないというてました。

山口 そやから、旅行部は17年で解散してしまったんで、近藤さんやらが入ったとき、旅行部というのは、京大にないわけですわ。ほんで、三高の山岳部の連中が、京大旅行部がないから京大のそういう関係のところは無視して、結局、OBは京大ではそういうものに入らないで三高の山岳部の面倒をみて、皆一緒に行ってた。だから、近藤さんからもうちょっと上の連中からは、三高の中では山岳部と探検地理学会なんか、大論争やとった。それで、梅棹、川喜田、それから、市原実なんかその探検地理のほうに行って、野田吉兵衛とかの山を主に行ってた連中というのは、そのまま三高の連中と一緒に山へ行ってる。だから、京大では旅行部とかそういうもの一切、僕らのちょい上の梅田とかでもなかったから、結局、三高の連中と山へ行ってた。そういう期間があるわけですわ。

中尾 解散させられたというのは、あったように思う。

山口 吉良さんは、「解散した」とはっきりいってました。

藤平 その後、続けていいいます。私が昭和20年の秋に復員してきて、21年の春に林君と一緒に剣に登ったんですよ。帰ってきて、確か、そうやったと思うな、2人で西部構内うろうろと歩いてたら、「スキー山岳部員募集」という張り紙が掛かっていた。あれ、おかしいなという

ことで、旅行部の部室へ行ったら、おったのが池田君と舟橋、それから、橋本、この3人なんだな。なぜおかしいなと思ったかという、昭和18年に探し求めても旅行部というのはなかったからね。どうしてそれがおるんだろうと。山岳部と旅行部が別なんだろうとかというのがわからなかった。少なくとも、旅行部らしきものを戦前にタッチしたことがあるのは、私ぐらいが最後という感じがしたもんだから、どうなったんだろうとそのへんに聞いてもわからなかったんだなあ。要するに旅行部とは、全く関係ないスキー山岳部というのができたんだと思った。そのへんのことは池田君にもういっぺん聞いてみたいわけ。あんたら3人が集まった……。

池田 僕が、木原はんとこへ行った。

岩坪 何年ですか？

池田 昭和20年。僕が20年の8月に除隊になって、9月の2日から学校へ来てたから。それで、木原はんとこへ行って、まず第一番に集まる場所が要るから、旅行部の部室を提供してくれ、ということで提供してもらって、そこでトグロを巻いてただけの話。そのときに、木原は人はスキー部も一緒ということで……。

藤平 それでスキー山岳部になった。

池田 そうそう。主に木原は人は、スキーのほうに力を入れて、それで、21年にスキー部と分かれた。部室、半分は割って。

藤平 そしたら舟橋、橋本というのは、そのきっかけで来たの？

池田 そうそう。

藤平 一番最初は、あんたがやったわけだ。

池田 まあそのとき、伊藤もおったけどな。

藤平 えっ、伊藤は後や。

池田 いやあ。

藤平 というのは、私が覚えているのは21年の5月に部室へ顔を出してみたら、その3人がおった。そのうちにね、1週間ほどしたら部室の黒板に屏風岩正面の絵がかいてあって、ルート図が掛かっている。あれ、登ったような形になってるわけやな。

池田 そうそう。

藤平 いや、これどうなってんだ、あんたが登ったのかと聞いたら、「いや、伊藤洋平なる男が現れて、八高のOBで盛んにこの話をしていたんだ」と。その2、3日後にパタッと本人と会ったわけだ、部室で。そしたらなんのことはない、昭和18年に暗がりて声を交わしたご本人であった。あのときから、ちょっとでっぶりとしておったが、わかった。そのときが伊藤は初めてだよ、山岳部は。

池田 そうかなあ。

藤平 木原さんところへその後でも行ってるんだな。

池田 行ってる行ってる。

藤平 そのときにお菓子がないから菓を食べると菓を出された覚えがある。

酒井 なんで菓を？

藤平 いや、菓はほとんど全部砂糖だからと。

岩坪 部室というのは、解散を命じられた京大旅行部の部室ですか？

池田 そうそう。また、戻ってる。

山口 西部講堂の西の方。西部の食堂の西やった。

池田 半分区切ってスキーになって。木原は人はそのスキーのほうへ行ったな。橋本もスキーのほうに入ったんだな。

酒井 スキー山岳部の部室には図書なんかは既にあっただけですか？

藤平 全部、そのまま残っておった。

岩坪 当時のスキー山岳部が旅行部、AACKに関係してなかった。旅行部のOBたちが、「あれはあいつらが焼きよったんや」となんとなく思っはるんです。あれ延焼なんでしょう、火事(22年12月8日)というのは？

藤平 あれは、食堂から出た類焼でしょう。

山口 類焼。

岩坪 延焼やからしゃあないやないか、というんですけどもね。

林 その前に池田さんに、僕の記憶であるところ、福井三郎という、今、バイオテクノロジーで有名な人らしいがね、旅行部の備品だというて、テントとかそういうものを疎開していたんだというて部室に持ってこられました。で、僕は福井さんという人に初めてお会いして、自分はスキー部だから、いうふうなことがあったんですけど、その福井さんを池田さんのときは知らなかった？

池田 知らない。

林 途中から、福井さんが出てきたんだね。福井さんに実際に会って話を聞かないとわからない。そのスキー部というものの残党は、いたことはいただけどね。だから、木原さんの配下でそういう人がたぶんいたんじゃないかと思うな。

池田 そうや。

斎藤清 池田さんにもうすこし、最初のころの話を。

池田 部室をもらいにいって……。

斎藤清 一人で行かれたんですか？

池田 いや、あのときは、さあ、そこまで記憶がないんや。

岩坪 なぜ木原さんのところへ？

池田 その当時、旅行部の責任者が木原さんやった。

藤平 そのときまだ、今西さんは帰国しておられない。

岩坪 池田さんは、それまで学徒動員で兵隊に行っていたわけですか？

池田 いや、わしは夏休みだけ兵隊行った。

林 ハシケンとはいつお会いになったんですか？

池田 やはり、そのときですよ。舟橋と橋本のほうが先知ってる。

藤平 舟橋は泰安の関係かね？

池田 そりゃ、後からのような感じですか。やはり高等学校のとき、やとったとちがうかなあ。あれは学習院で。

藤平 要するに舟橋は泰安の一番弟子やった。

池田 泰安の。それはよういうてたよ。

斎藤清 そうすると、池田さんは戦争が終わって、その秋には旅行部の部屋に？

池田 そうです。

藤平 確か、剣の八ツ峰を登ってきた後だったかなあ。

斎藤清 そのとき、名前は山岳部ですか？

池田 スキー山岳部やったな、最初は。

酒井 それで、1年後ぐらいにスキー部と分かれてから、初めて山岳部になったわけですか？

池田 橋本が、「わて、スキー専門でいきますわ」と、それで行ったわけです。

AACKの再建

中尾 この、『50年史』、三高会館でやったAACKの再建会議はどなんぐあいになってるのかね？

山口 僕の記憶では、昭和27年や思うんです。人文の本館でやったんですわ。

中尾 そうじゃない、三高会館だった。

山口 いや、三高会館じゃないですよ。AACKの戦後再建のあれは、人文の本館ですわ、北白川の。

中尾 昭和27年、それはマナスルへ行った年だね。

山口 そうですわ。

中尾 あの三高会館の再建会議はね、26年の、確か、秋だった。

山口 会議はどうか知りませんが、正式の発足のは、桑原さんが委員長にはなって。

中尾 それは、FFP中心でヒマラヤ計画立てとった。それがマナスルという目標が決まったりして、山登りのメンバーが要るちゃうわけだ。そのときまでのAACKというものは、白頭山の思い出の会みたいなもの。そのときからAACKに入ってたメンバーが、吉良、梅棹、川喜田、私ぐらいで、いわゆる今西1期生だ。でね、集めようということになった。つまり、それまでクローズしておった、AACKはずっと。

池田 そうやな。

中尾 オープンにしようという方向転換の会議を三高会館でやった。

山口 それ、最初はそうかもわかりません。

中尾 最初、そのときはね、今西さんの命で僕が三高会館でその会合をアレンジした。三高会館は、それまで僕はそんな所在を知らなんだ、三高の人間じゃないから。教えられて、三高てこんな家を持っておったのかと。そのとき、結局、オープンにして山岳部、旅行部出身者をみんな入れようということになった。

山口 そのときの準備の事務局長は工楽さん。土倉さんがマネージャーみたいにして動いてて、その手伝いを僕がちょうど、確か、大学院に入りたてだったと思うから、27年にやったと思うんです。それで、北白川であったんですわ。

中尾 そっちのほうは、僕は覚えがないね。つまり、その公式的な。

山口 皆一緒やったと思うんですけどね。林さんやら覚えてはらしませんか？

藤平 もう卒業してましたよ。

池田 20年の暮れから、21年、22年ちゅうところはこっち側だけのグループやわな。

藤平 20年から21年いっぱいぐらい。

池田 そやから、その当時、そろそろヒマラヤへ行かないかなあというような話しても、それがAAACKとは結びついておらんわけですわな。

藤平 その当時はね。

斎藤清 そのころのメンバーは？

藤平 割かた数だけは揃ってたんですよ。八高系の人と学習院系の人と。

池田 東京系やわな。

藤平 そして、富山高校系の人がおったわけ、数が多いのはね。ところが、そのうちに、山岳部の部長が要るんじゃないか、スキー山岳部の、という話が出て、部長が現在、誰なのか、あんのかないのかもはっきりしなかったんで、洋平が、「木原先生のところに相談にいったらどうだろう」と。特に、「今西さんが帰ってこられて、いつの間にやら旅行部の看板がなくなって、スキー山岳部になって、不埒千万だと怒っておられる」という風説を伊藤が伝えてきたんだ。今西さんは、「わしゃそんな怒った覚えがない」というんだね、4、5年前に聞いたら。そういうことで、こらあかんと木原先生のお宅へ直訴に行った覚えがある。

池田 だいぶ行った、あのとき。5人ほど。

藤平 そのときもお菓子代わりの菓食わされた。

池田 木原さんは、晩泊まって帰れ、というくれたな。

マッキンレー論議

藤平 それで、「今西のヤツ」とはおっしゃらんかったけど、「ああ、今西君のことは心配すんな、俺がちゃんと代わりの部長を世話してやる」と。確か、酒戸さんの名前が出なかったかなあ。「酒戸君がいいんじゃないかな」と。

そんなことが一つと、そのうちに、我々もガヤガヤとやっておるうちに、主に洋平ですけども、「ヒマラヤへ行きたいけども、どうも今のシャバの情勢じゃ無理だ。一番手取り早いのがマッキンレーだ。夏休みに貨物船に乗り込んでって、向こうで中古の車でも借りれば行けるんじゃないか。夏休み中に行つてこれる」という話が出てたんですよ。21年のことなのか、22年になってるのか。21年だな、終わりごろかもしれないけども。そしたら、どっからどう連絡があったんか知らんけども、これは全部洋平がやっていたみたいだね、AAACKとは。梅棹さんが、私らに会いたいということで、じゃあ、と進々堂で会ったわけ。私と、あのとき、4人ぐらい行ったかね。洋平と舟橋、林、池田、こんなとこだったかな。

斎藤清 これは23年ですか？

藤平 いや21年か22年か。

林 もっと遅いような気がするんだけどね。

池田 もっと遅い。

林 梅棹さんが、そのいわゆる会見を申し込んできた。

藤平 これは、私が正籠にいうと、20年の9月に復員してきて、21年の9月に卒業になって、22年の3月か春まで大学におった。だから、その間のできごとなんですよ、確か。だから、21年か22年。私の記憶では、主に2つぐらいのことが論議されておる。梅棹さんは、専ら、「なんでお前ら、ケチなアラスカなんかに行くんだ。なぜヒマラヤを目ざさない」ということだけ頭の記憶に残っている。それと、もう一つ、梅棹さんは、私らの山登りに対する非常な違和感を持っておられた。私とか洋平というのは、いわゆるクライミングオンリーの当時という先端的な登山をやつてんじゃないのかと。私らとだいぶ違うというのが梅棹さんの頭にあってたわけで、その登山論議とマッキンレー論議とが並行になっておるんですよ。マッキンレーというのは、まさしくこっちが一本取られた形で、おっしゃれば全くその通りで、私らにすりゃ、こりゃ主目的じゃないつもりで夏休みの片手間に行つてこれるじゃないか。こちらが全力を挙げるといふつもりはなかったわけ。まず、そのことでヒマラヤというのを現実に突きつけてきたのは、梅棹さんだ。私らは、まだ潜在意識というか、もうひと山先だと思っていた。ちょっとなんか、えらい急にポコッと目の前に突きつけられて、こりゃ一本確かにまいった。それから山登りの考え

方については、そうとうな口をきいた。

中尾 山登りの考え方についてはね、鈴木信がかなりはつきりしておつてね。

藤平 例えば梅棹さんは、こういう質問をなされたんですよ。「君ら、そんな山登りをしておつて、雨の中で焚き火を焚けるのか」と。今みたいに燃料を持っとるわけじゃないし、戦争中に山登りをしとりゃ、どんなときでも火をつけられますよ。私にいわせれば、正直いってそんなのは藪山の技術じゃないか。藪山の技術がヒマラヤで役に立つのかと。クライミングが主であるというのが私の考えであった。梅棹さんなんか、どうも、エクスペディションという頭が強いんですよ。そのへんの食い違いがどうしたってでできた。「私ら、梅棹さんが考えておられるような山登りとかさういったものオンリーではありませんよ。山っていうのは、もっと広い意味でつかんでいる」というところで、お互い意見が一致したのか一致したのか知らないけども、今でも山登りに対する考え方についての違和感はありましたな。藪山の技術がヒマラヤで通用するのかと。やっぱり、ヒマラヤというのは、あくまでクライミングが主体だという頭が依然として残っていた。ところが、どうしてもそのへんの食い違いはあった。

岩坪 その話があって、後、もうバツと、割合きれいに藤平さんと梅棹さんが……。

藤平 あれは、あれだけいだけいたら、お互いすっきりした。大体、4時間、コーヒー1杯で4時間。

斎藤清 その進々堂でですか？

藤平 えらい長い時間かかったと思う。

岩坪 私たちが、その話のむしかえしを聞くのは、例の探検部ができるまでですけども、そのときに僕は、鈴木信さんのことを聞きました。

林 いわゆる進々堂会談というのは一つの契機であったことは事実。その前にすでに何回か、いわゆる鈴木信とここにいる山口、その間に三高の高橋太郎とか……。

山口 高橋太郎、知ってはりますか？

林 知ってる知ってる。高橋太郎、それから、末包慶太、そこらへんといわゆる何回か、我々との折衝があるわけです。それにやはり、鈴木信というものと梅棹さんというものとのいわゆる対比がある。その間に食い違いが大いにあるわけですよ。我々としたらどっちかというと三高勢タイプの代表というのはどうも鈴木信にあった。今の藤平さんの話じゃないけども、梅棹さんにはどうもくつきにくいような要素が我々にはあったわけですよ。だから、話し合いというのは、どうも鈴木信との間で。ところが鈴木信と今西錦司さんとはこれは南朝北朝じゃないけれど、まことに意見の疎通を欠いておる。それで、

鈴木信にいわせると、今西さんというのは、どうもいうことが猫の目を変えるように変わる。あれでは困るといふふうなことね。かなりの今西批判というのはあったわけですよ。

『岳人』創刊のころ

林 そのころなんか、ヒマラヤの火がポーッと燃えて、それで、我々と今西グループのパイプが、まあ、いうたら太くなってくる。

中尾 今の話に入る前にね、洋平やら梅棹とヒマラヤ計画を始めて間もないときに、やっぱり、鈴木信と進々堂で1回会った。ところがね、要するに鈴木信は、「洋平は立派な山登りだが、梅棹、中尾のごときは登山家の端にも入らん」といいよる。それがヒマラヤへ行くなんておこがましい、というのが本音だね。

岩坪 川喜田さんは、「自分は鈴木さんに三高山岳部を破門された」というてました。

山口 探検地理学会との確執ね。

中尾 こちらのつもりはだね、三高派の、まあ、ゴリゴリ登山派の中心の鈴木信と、マナスルやらんかという計画を組もうと思ったのにだね、そこで、結局、喧嘩別れみたいになっちゃった。

林 大したもんだな。

岩坪 その新しい新興勢力の前に、既に、南北朝が別れとる。

中尾 別れとるんだ。

藤平 もう、別れとったんか。

池田 そやけど、21年ころちゅうのは、まあ部室へ集まってヒマラヤちゅうよりか、外國の山へ行きたいという希望だけであつてやな、手立てがどうのこうのということやなしに、希望だけは皆あつて、そんな話だけはヤイヤイしてて、そういう空気の表れが、あの、『岳人』ちゅう山の本に集約されてきてるわけです。こらまあ、わて、発行者になってやったんやけども、その当事としては、AAACKの過去の動向とかさういふような事柄は、全然関係なしに、自分らの淡い夢ちゅうものをなんとか実現できんかと。中尾さんや西畑さんやらにただで原稿書いてもらて……。

斎藤清 原稿料はただですか？

池田 ああ、ただや、ただや。ただでしな、先生？なんにもギャラもろてまへんな？それから、だんだん安定してから人脈が出てきてるわけやな。

斎藤清 その、『岳人』なんでですけど、採算合ってたんですか？

池田 だいぶ赤字やつて、自腹切つてたけども。最後に、八高出て伊藤の後輩やつた立平いうのが……。

藤平 ああ、立平ね。石川テレビの社長。
池田 うん、立平が中日新聞へ勤めたわけや。アルプスをかかえながら、山の本がないちゅうことは、中日としては寂しい、ということで、亀山さんいうてな……。
藤平 亀山さんか。常務やったかな。
池田 それが、「ちょっと来い」いうんで、行ったんや。「立平君からこういう話聞いてね、それこっちへ譲らんか」ちゅう話。赤字埋めてくれんねんやったら、それ譲りまっさ、いうて、その場で譲ったんや。こっちが出したんが13号まで。14号から向こうが。
斎藤清 それまでは、あそこの北門出た白井さんとこの……。
池田 ああ、白井さんとこ。立平君も大学時分には、こっちで雇うてましてん。校正もこっちのほうですんの邪魔くそうなってきて、お前、やってくれ、いうて。そんな関係で、中日に入ったときに、印象がきつかったんやな。そやから、最終はとんとんになった。そんなときに版權売ったからな。
斎藤清 版權も？
池田 ああ、版權、買うてくれたな。忘れもせんわ、4万円。
斎藤清 『岳人』の版權？
池田 うん。それで4万円もろて帰ってきた。
斎藤清 1000部ということになってますね、創刊号。大体、そのぐらい出たんですか？
池田 最後、2000部は出てたやろと思うがな。ほかにないねんしな。学校の山岳部、それから運動部や、そこら皆送り付けて。今でいう、東販とか日販とかあんなんとは関係なし。ただし、文部省から第3種郵便の許可だけは取りつけた。それもろたら、紙の配給もおましたんや。
斎藤清 『岳人』と山岳部との関係はどうでした？
池田 話していく間に、「なんやったらやろか」いうて伊藤君がどこやらの先生から原稿もろてくる。こっち側は、早速、その仕事をしてるちゅう格好やったわけですわ。それと部とは関係なし。
藤平 結局、池田君と伊藤君が主としてやった。その縁で、いろいろ書かされちゃったということですよ。
斎藤清 京大山岳部のメンバーがそれを手伝ったとかいうことは？
池田 そんなん、なしや。
斎藤清 伊藤さんは、その思い出話をなんかに書いていたね。
池田 それで、原稿を書いてもらいにいって、大体、人脈がわかってきてるわけや。
藤平 22年の3、4月ごろかなあ、私の下宿へ伊藤君が、「カンチの登路を研究せんか」いうて、風呂敷にいっ

い資料持ってきた。カンチエンジュンガの写真広げているいろいろやって、ヤルンから登るということを結論づけた。初登のエバンスのルートあるでしょ。ヤルンから、でかいバンドを馬蹄形に見えた横、右側登っていく、あのルートを想定したんですよ。だから、ドンピシャリだった。ゼムー・ギャップからの東稜とか、パウアーの北東稜からとかなど、いろいろ見たけれども、一番可能性のあるのは、やっぱりヤルンからだ。その前に、ちょうど、ティルマンがエベレストの南面に入ってますわな。そのレポートを見ると、このほうが北面よりも絶対に確実やなという見方をしたんです。問題はアイスフォールの突破だけだろう。ここが突破できればそれまでよ。技術的に難しくないとみたわけだ。後は要するに、装備と体力の問題である。ルートとしての可能性ははるかに強いと。どうも、2つともね、今からみると、まことにドンピシャリだった。我々をして行かせてくれたら、もっと先に登っちゃったなと思ってんだけど。

山岳部の山行

斎藤清 山岳部としての最初の山行はどこですか？
藤平 最初は、どっか近所の岩場へちょこっと行ったことあるんだな。醍醐にある五丈岩と、高野の電車の停留所の横の岩場。なんか、ほうき持ってかなきゃ登れなかった。掃除してからでなきゃ。それから最初がね、21年の冬、正月だよ。白馬へ。
池田 あれが最初ぐらいかな。
藤平 汽車乗れんかってね。結局、林君とあんたと舟橋と4人じゃなかったかな。あれ、どこ登ったんだっけ？
池田 真っすぐ登るいうて、道、間違うて。
藤平 確か、あれは、白馬の正面尾根を上がると……。
池田 東面や。東面を上がるいうて。
藤平 東面の頂上の真下を上がったんやね。
池田 そう、そうそう。
藤平 夜中に道、間違えちゃって、横の山に登ったんだな。あれ、小蓮華かどっか上がっちゃったんだな。
池田 そういうこっちゃ。
藤平 あれは、『岳人』に載ってる。
池田 夏、冬は必ず行ってましたな。
藤平 22年の3月。剣の西面へ入った。私と池田君と舟橋、伊藤、杉山、5人だ。ブナクラの出会いにテントを張って、池ノ谷に直登して、右俣を上がった。その後で、2、3日して、今度は、猫又へ行て、そんなときに、杉山が一緒だったんだ。右俣行ったときは、杉山はキーパーやった。右俣は上のへんでなんか、雪崩そうだったもんだから、左岸の尾根というより壁へ取っ付いて逃げたんだけど、これが大変しょっぱくてね。

斎藤清 それが、最初の冬山らしい冬山ですか、戦後の？
藤平 その前に、白馬。谷川岳に合宿したんは、その後かいな？
林 谷川岳はだいぶ後やな。あんた知らんか？
山口 僕は知りません。まだ、入ってへん。
酒井 池田さん、スキー山岳部は、1年後にはスキー部が独立しますので、山岳部になりますね。部長は、木原先生が、心配するなとおっしゃってくださったんで、どなたに？
池田 結局、決まらんかったな。
藤平 ともかく、その話聞いて、農学部で酒戸先生には会ったと思うんですよ。「うん、わかったよ」という程度のお話で。
池田 正式にはなってないな。
岩坪 斎藤Yさんは、「木原先生が部長やってもなんにもしてくれはらへんから、誰か別の人に」というたとか。
斎藤清 僕のリーダーのときですね。
岩坪 ということは、その当時は、木原先生が部長であったということになるんですけども……。
池田 まあ、なるんかしらんけど、部へ出てきたこともないな。
林 さっきね、有光さんの話が出ていた。あれは何年ごろですか、池田さんがいうとったスキー部を分かれさせたというの？
藤平 僕は卒業しとったんか？
池田 いや、22年やな。

笹ヶ峰ヒュッテ

中尾 この、『50年史』は笹ヶ峰の小屋の問題は別か？
林 それも、ちょっと話の中に入れなあかんね。
池田 あれ、なんや、修繕に行かされたんとちゃうかなあ。
斎藤清 戦中は、誰も管理してなかったんですか。
中尾 放り出してあった。
池田 そんで、こちらが修繕に行ったんや。
藤平 あのとこ、笹ヶ峰と志賀高原と2つ修理に行った。大学から頼まれて、志賀高原は私と舟橋が行ったわけ。秋だったと思う。屋根に上がってみたら、ホコボコ穴が開いててね。その後やね、山岳部とスキー部を別々にしたのは？
池田 そうや、その後ですよ。
中尾 あれは、高橋健治かの名前にして……。
岩坪 そうです。それで、高橋健治さんの名前で京都大学に寄付するという……。
林 スキー部が分かれたときに、小屋の問題で、我々は非常に困ったわけですよ。志賀と両方で。面倒とっ

てもみきれんと。この際、スキーだけという人もかなりいるから、スキー部を分かれさせたらいいんじゃないかと。そのとき、北村修一という男がそれをまとめてスキー部の初代ができたと思うんですわ。そのとき、志賀高原の小屋をつけて、我々から分かれたんですよ。
池田 22年やったと思うけどな。
岩坪 ヒュッテが、高橋ローゼさんの名前から京都大学の名前に移りまして、ヒュッテの土地を妙高高原町から京都大学は借りたときに、笹ヶ峰ヒュッテの歴史みたいなのをコピーして、京都大学が竹田町長に渡しとるんです。それが、この書類なんですけど、この出典はどこなのか、ご存じでしたら？
林 これはわしも覚えとる。藤村、お前さんが書いた。
藤村 ちょっと見せてくれませんか？ 懐かしいな。
岩坪 ヒュッテ、そのものの所有者は？
西堀 京都大学や、初めからね。
中尾 うーん、あれは、高橋家のものじゃなかったですか？
西堀 ないんです。
岩坪 登記書類はそうですよ。
中尾 僕の記憶では、財産税がローゼさんにかかってきて、ローゼさんが木原先生に相談した。それで、僕も木原先生にいわれてローゼさんとこへ行ったり、木原先生は大学と交渉して、大学寄贈の手続きをして、財産税を免れたような……。
西堀 最初、建てたときはそうではなかったな。後でそういうふうに変ったんかもしれん。
岩坪 大学に残っている書類は、中尾先生のおっしゃる通りです。高橋ローゼさんの個人の所有物です。
中尾 だから、それで、財産税のときにどうにかならんかという話が出てきたんです。
西堀 まだそのときは、ローゼと結婚してへんときとちゃうか？
斎藤清 高橋さんが亡くなった後に、ローゼさんに引き継いだんですわ。
西堀 なら、わかるけど。
中尾 どっかの時点で、高橋健治の名前になったんじゃないですか？
西堀 ローゼと結婚したのがね、我々が樺太行ったときと同じです。
斎藤清 樺太行ったときに、船で出会うわけですね。
西堀 船じゃなくてね、札幌で。それで、帰ってきてしばらくしてから結婚した。
岩坪 笹ヶ峰のヒュッテで、大学の食堂の親父を連れて大スキーパーティーをやったはるの、AACKの『時報』に載ってますわね。

西堀 あれはね、でてから2年経ってました。

西堀、ネパールへ

齋藤清 戦後のことを西堀さんに……。

岩坪 そう。ネパールへ交渉に行かれるときの様子を話していただくと、今までの話が、だいぶ補充されてくるんじゃないかと思うんですけど。

西堀 だいぶ記憶が薄れてますが。私はやや受け身な立場でいつもおったもんやから、ちょっと出てこい、いうから出てきたようなもんで。その前に、あの調査の問題については、伊藤ヨッピーのグループや、皆相談して計画を出したんとちゃうんか？

岩坪 そうです。

西堀 そのときまだ、私はフリーで暇な立場にあった。私が手づるを作ったんは、竹節さんがその前の年のアジア大会に出て、クリシュナを知って、そのクリシュナの名刺をもらったから。で、木原先生のお供して、インドへ。木原先生はインドへコメの種かいな、を提供しはったんで、ネールさんがお礼にインド学術会議の名誉会員になってくださいということで、第1回めのインド科学会議へ招待受けたんですな。私がついていくことにしたんだけど、その当時はまだ、出国するのがそう簡単ではないわけです。もう一つ大事なことは、外貨をどうするかというのが大問題で。それでまず、学術会議に交渉に行った。亀山という化学の先生が会長で、前から知ってるもんやから、私も学術会議の推薦、日本代表として認めてくださいと。そしたら、「そんなこというたってあかんよ。木原先生は向こうから招待してるし、藤岡はこれからいろいろと学術交流をするについて経験を積んでおきたいから是非にというので、交渉しておる最中なんだ。そこへ木原さんのお供さしてくれいうたって、それはあかん」というて、亀山さんは反対しよったんですね。そやけど、物理と生物がいるが、化学が抜けるのんおかしいやないか、と自分は化学屋やもんやから。まあ、わかったんかどうか知らんけど、しゃあない、というて、代表者の一人として認めてくれる。「しかし、これは学術会議の正式許可でも何でもないので、自分の個人的な手紙として扱ってくれよ」と。しかし、それがなかったら、出られなかったと思う。それからもう一つ、お金の問題。費用は、毎日新聞がもつとってくれたんですけど、それを外貨に替えることは、毎日新聞も直接はやれない。だから、UPの特派員ということにして、ダムダム飛行場で受け取るようになった。

この前、木原先生が亡くなられて、密葬で、あの人はなんていうたかな、当時自動車運転して羽田へ送ってくれた人に会ったが、「西堀さんは、後ろの座席から前の

座席へ走ってる車の中で移ってきた。それから、あのときに、エテサン・ニシボリとの名刺をくれた。私もそれを今でも持っていますよ」とその人が行ってたな。

ダムダム空港に着いたのが、それがね、31日の夜中なんですよ。

齋藤清 12月31日？

西堀 うん。なんぼ、場内アナウンスしてもろても、誰も金持ってきてる人は、いてはらへん。しょうがないからホテルへ行こうということで、グレートイースタンホテルへ落ち着いたんですよ。明るる日、インドの役人が来て、「何人日本からみえましたか」と聞いたとき、藤岡が、「ツー」いいかけたのを遮って、「スリー」にした。それっきり、私は正式代表に化けたわけ。ネールさんが三々五々、各国の代表を昼飯に招待するということで、あれはカルカッタの市長公舎だったな。そのときに、木原先生と我々が用意していった、誰かが作ってくれて持ってたんやけども、合同登山計画、インドと日本とのジョイントエクスペディション、ネパールへのプランがあって、それを説明したいから、時間をくださいということをあらかじめいうておいたので、早速、飯食うた後でソファに座って、主に私から説明したんです。そしたら「Quite Interesting」という言葉から始めて、「自分はもう、大変賛成だ」ということをネール自身が我々にいわはった。そして、バトナガーという科学教育大臣をネールが呼んで、「これが成功するように、万事あなたはお世話を申し上げろ」ということを英語で命じておられた。で、バトナガーが早速、「あなたがたがニューデリーにおいでになったら、そこで、細かい打ち合わせをいたしましょう」ということになった。それから、ほかを回り、ニューデリーに到着して、計画を皆で話したところ、「これは、インドとしては、まだ実力もないし、ジョイントをする趣旨においては大変賛成するし、こうしたいと思うけれども、実現不可能である」ということをいうてくれたんです。そのとき、木原さんはほかへ回るいうて、私一人がインドへ残ることになった。それで、私が今西あてに送った電報があるはずなんやけども、それは、「トリックシマナシ」という電報になっていたと思います。そしたら、今西から、また返事が来た。「ガンバレ」ちゅうか、あくまで頑張れと。それで、今度は銚先を変えたんですよ。直接交渉をやろうと。インドとは別に。

岩坪 ネパール政府に？

西堀 ああ。それで、ネパール政府にコンタクトする努力をしようとした。そこで、ラフルールというものが現れた。これは、非常に特筆すべき重要人物で、イギリスの隊がネパールに行くとき、世話をするリエゾンオフィサー

一であったわけです。しかし、本当はリエゾンオフィサーというけれども、むしろ、小間使いみたいやったんやろと思うんです。で、これが私にいろいろ入れ知恵してくれて……。

岩坪 それはネパール人ですか？

西堀 いいえ、インド人です。純然たるインド人です。それで、ニューデリーのそいつの下宿へ行ったら、屋根裏に住んどって、実に惨めな生活をしておった男であるけれど、だんだん話を聞いてると非常に詳しい。そして、協力者にして、彼のアドバイスで、インドなんてなことは考えずに、直接やったらええやないかとなった。それで、やり方についてのいろいろな秘訣は、彼にいろいろ教わったわけです。いよいよ単独で行くということに交渉を始めたのは、ラフルールのサジェッションではあるけれども、それ自身にはラフルールは関知していません。つまり、手の内を教えてください。「インドとネパールは決して親密ではないが、隷属しているわけではないから、堂々とネパールと交渉したらええやないか」と。それで、クリシュナへ手紙を出したんですけど、いつまで経ったって返事が来ないので、だめだと思った。そしたら突然、こっちがニューデリーにおるときに返事が来た。「パトナに使いを出すから来い」といつてきたが、実は電報を出した人の名前が書いてないんですよ。誰かわからんけど、クリシュナがそのアレンジをしてくれたことは事実だし、当時の首相であったコイララということは、後でわかったんですけど、そういうことで、ネパールに行って、お願いしてきた。インドに出て、ラフルールを呼んで、今度は登る準備としてのシェルパの選択を始めたんです。ヘンダーソンに会いにダーズリンに行って、ラフルールにも来てもらった。夫人がラフルールをかわいがってたから。いい換えたら、ラフルールのいうことならなんでも聞くというので。カルカッタに戻ってから、最後に、飛行機でいっぺんヒマラヤの写真を、特にマナスルの界隈を航空写真で地図をこしらえる程度の写真を写したいと思って、アレンジしたんだけど、途中でインド政府からインターフェアが入って、もう酸素ボンベやら、そんなもん皆用意して、飛ぶその日の朝になってやめることになったんです。しゃあないから、せめて写真だけ写してくれいうて金やっただけど、とうとう私が向こうにいてる間にフィルムを見ることができなかった。その後、田口二郎がインドへ私用で行って、そのフィルムを受け取って現像してみたら、どこの山やわからん。これがマナスルやいわれても、わしもそうかいなと思わなしょうがないし、地図やらで調べても全然わからん。

中尾 あれは、踏査隊が帰ってきてからでしたかね。そ

のポジができたのは？

西堀 いや、そうやない。踏査隊が持っていったんや。

中尾 持っていったんですか。

西堀 わからずじまいで持っていったんや。

中尾 なんだか、割に小さい山だったような。

西堀 そのようだ。ガネッシュの端くれみたいなのところを写しとったんやないかと思う。

マナスルをJACに譲る

岩坪 その当時、ネパールと交渉しておられるときには、西堀先生の頭ではOKになったら、日本からどういうふうなのがあるのかと思ったはりましたか？

西堀 帰ってくるときは、王様が、「この山は登れるまで日本に許可をあげろ」といわはったんですけど、そのときはまだ、許可そのものは、受け取ってきていないわけです。口約束だけ。それで、帰ってきて、皆に報告したときから始まるわけです。大体、私としては、初めて行ったヒマラヤであるし、こいつ、飛行機から見ただけやけれども、果たしてどこまで登れるやろかなあ、ということ。これはやはり、ステップをさうとう踏まんらんあ、ということは感じてたのが一つと、初めてそういう国際的ないろいろな交渉をしたときに、やはり、日本山岳会という一つのポジション、私はそのとき、FFで行ったんですからね。AAOKという言葉は一つも使っていないんです。

岩坪 それはなぜです？

西堀 そうしたほうが、入りやすかろうという配慮があった。

岩坪 学者として、行っておられるわけですね？

西堀 学者として行った。しかも、触れてみははっきりFFとして。

岩坪 学術会議には、ケミストとして、行ったはるんでしょ？

西堀 そうです。それはインドに対して。

岩坪 ネパールへは、今度はFFのメンバーとして？

西堀 FFです。その当時の政治事情というのはね、おかしいもんですよ。例えばね、日本在外務局へ行ったときに、私はネパールへ入りたい、といったら、「そんなばかなことはやめてくれ」という。なんでや、と聞いたら、「もし、日本にネパール政府が許可をしたら、ソビエトが入れてくれ、いうたときに断れないではないか」と。そんなおかしい理屈はない。あんた、一体、どこの国の人ですか、というてやった。

林 最初、マナスルという名前が出たのは？

西堀 それは、今西がサジェッションした。

林 今西先生が？

西堀 うん。調べるなり、「やんねんやったらマナスルやぞ」とこういうた。木暮さんが日本山岳会のなんやらに書かしたのはあるでしょ。

中尾 その一覧表を見て。

西堀 一覧表を見て、「8000m以上の山はそれしかないなあ」いうて。

中尾 今西さんがね、アンナプルナの次に高い山でと。

林 それは、どこにある山か、さっぱりわからなかったんでしょ？

西堀 ちょうど、藤木九三さんが、『ネパール』という大きな本を持っておられて、それを借りて持っていったんです。旅行中にもずっとそれを読んでました。

林 それで、マナスルという山の所在や、アンナプルナの近くにあるとか、そこらへんは？

西堀 いや、飛行機から見たとき、どれがそれやろなあと思たって、全然わからへん。許可を得るためには、ちゃんとした位置をいわんなん。それで、聞いてみただけ、誰も、マナスルなんていったって知らへん。役人は全然知らへん。地理の先生に聞きにいったら、それも知らへん。どないしようかと思っていたら、カイザーラナ將軍がやね、「家のライブラリーに地図があるよってに自分で探せ」と。それで、行ってみたら、彼は玄関に待ってあって、部屋へ案内してくれて、明治天皇の写真の前を通ったとき最敬礼をしたら、「おお、お前はリアルジャパニーズだ」といって背中を叩かれて、それから態度がずっとさらによくなって。でまあ、晩飯食わせたりなんやらしてくれて……。

斎藤清 そこで見つかったんですか？

西堀 そのライブラリーで、私はすぐ見つけました。

中尾 それは何万分の一、百万ですか？

西堀 それを写真に写したんだけどね。何万分の一だったかね。

岩坪 3つに分かれたのですか？

西堀 いやいやもっと詳しい。

中尾 紫色の？

西堀 そうそう。

中尾 それじゃ百万分の一です。

西堀 ああそうか。それで、カイザーラナ將軍に見して、これや、ていうたんです。「ああ、それなら国境からだいたい離れているから心配ない」と。その翌日に、また、王宮に呼ばれていった。そのときに、ほかの大臣、外務大臣なんかがいよって、そこで、將軍が、「ドクターニシボリが要求しているのはこの山です。だから、国境からは離れていますから、国交上の問題はありませぬ」ということを皆に説明した。そしたら、王様が、「それなら、この山に登られるまで許可を与えろ」ということを

いわれた。私としては、その前に3、4度呼ばれて、王様に、日本のことをいろいろと聞かれたりしていたが、「登れるまで許可を与えろ」とこれほどいい言葉はなかった。許可が来たんはだいぶん経ってからですよ。

中尾 6月かもしれん。京大の中でしばらく迷ってたんです。京大の中でね、FFというものがわからなかった。

西堀 ははは、そうやと思う。

マナスル偵察隊

岩坪 西堀先生のそういう交渉の結果如何と日本で待っている今西さんやその周りにおる中尾先生らのグループでは？

西堀 それについてはね、かなり早い時期に、私は、登山そのものは、京都大学という一つの小さな単位ではなくて、日本全国的な色彩を持ったものがよろしいという進言をした。で、木原さんは、一番先に賛成をされました。それで、木原さんと私と2人で日本山岳会に持ち込んだわけです。ところが、向こうは楨さんとそういう連中が、随分よう集まったというほど、大物が皆集まりましたよ。そのときに、結論は、第1回の偵察隊は京都大学がイニシアチブをとってやりますと。そして、登山そのものについては日本山岳会がやる、いうことやったわけです。で、その場で決めたのは、今西錦司をリーダーとしてAACKでやると。そのときに、AACKというたか、京都大学というたかのへんはわからんけども、まあ、京都です。それはあくまで、登山そのものではなく、学術調査という形式をとります。リコネッサンスですというふうなことまで、割合、具体的に決まったですね。それから、後の細かい交渉は、ほとんど日本山岳会はあまりやってないんでしょ。

岩坪 でも、高木さんや田口さんみたいにAACKでない人も入ってるわけでしょう。

西堀 それは後で出てきた話やけども、我々は雪の経験はあっても、氷の経験はほとんどない。誰かないかということになって、まあ田口がよかろう、ということで、田口をそれから高木を入れることになった。

林 田口いうのは、スイスのグレードを持っていたとか。それをどうして抽出されたかどうか、私は知らんですけども、今西さんはこの京都大学の山岳部というのはその当時は、認識はそんなになかったわけです。

中尾 それで、AACKの再建委員会はね、1951年の秋だったか、ひょっとしたら、西堀さんの留守中だったかもしれない。最初に三高会館でやったの。

林 その、今西さんはアンナプルナのⅣ峰を試登したときに、僕と田口と高木がね、どれが強いかということをして双眼鏡で一先懸命見てた。そのとき、高木が一番先にへ

ばって、「もう俺行けんけどお前行け」というて、僕と田口が登ったが、だんだん2人も同じようにへばって来た。もうこれくらいでええやろう、引き返そうかという結論を2人で出して帰ってきた。それをしつこく、高木がなんでどうなったか、という話を今西さんが盛んに聞くわけですわ。なんでそんなことしつこく聞くかなあとは僕は思った。やっぱり、今西さんの頭の中ではね、どっちが強いか、というふうなことをしつこく考えていた。

中尾 あのと、今西さんは、なんでマナスル行くのにアンナプルナⅣ峰へ先に行ったか。あそこはティルマンが行って、その目盛りが付いている。

林 うん、そうです。

中尾 そこで試してみたら、すぐ日本の力量がわかると。だから、ティルマンの手をつけたところに行った。そういうふう記憶している。その林君と田口、高木3人が第1キャンプに上がって、そして明る日だったかな、ちょっと吹雪気味になってきて、僕が補給隊を連れて上がっていったら……。

岩坪 中尾さんが、「あいつらは登る気があるのかないのか」とブーブーいながら下りてきたというのはそのときの話ですか？

中尾 それで、帰ろうということになってね、僕はサーッと一気に下りて帰ってきた。「京都の連中は逃げ足が速い」といわれてね。

山口 そのときの偵察隊の隊員の選考のことで、京都のほうで、やっぱり、いろいろ企みがあってね。どうせ、偵察隊にドクターが誰か要るだろう。そうするとやっぱり、慶応の辰沼さんをJACが選んでくる可能性がある。やはりそれは、AACKのほうで今西さんに選択ささんといかん。それで、そのときに、伊藤さんと林さんがドクターとして名前が出た。伊藤さんは肥え過ぎて、僕らと一緒にいってもみそつけたりしてたんで、林さんを絶対行かさないかんとなった。まだ、隊員の選択がはっきり決まってないときに、今西さんが仙台かどこかウマの調査かなんか行ったはったんです。で、絶対に林さんをとるように今西さんに植え付けとかんといかん、と藤村が今西さんとへ伝えにいったように記憶してるんやけどね。

西堀 確かに、辰沼君を非常に押している気配があったんです。それで、私はそのことを今西君にいった。それを許したら崩れるぞと。で、偵察隊の人選についてはもう一切、日本山岳会系統は発言せんいうようにしてください、という交渉も念を押したんです。ただし、田口と高木の問題はね、むしろ私は推薦したほうです。

中尾 今西さんは2人をよく知ってたみたいでした。

西堀 私、よく知ってたし、彼もよく知ってたね。田口君の兄貴も。実際、京都関係では誰もこういう経験がないんです。だから、どこまで田口や高木にそういう経験があるのかいうことを、全然見当はついてないけれども、少なくともゼロではないだろうということぐらい。で、やっぱり、人間としてこれはいいだろうと。

中尾 そのとき、林君が決まってびっくりした。というのは山岳部と付き合いがなかったから、林君を知らなかった。初めは、伊藤洋平のいい出しで私が動いて、梅棹と伊藤洋平と私と3人だけで進めているような時期がだいぶあった。そして、結局、伊藤洋平は外れていった。そのことについては深く立ち入らなかったが。

山口 冬に穂高へ広瀬やザッカスたちと行ってちょっとみそをつけたり、その前の年に濁沢で合宿をしたときに、林さんが入られた次の年ですが、伊藤洋平さんが入ってきたんですが、若い連中からすると、肥え過ぎてて馬力もないし……。

岩坪 AACKの計画をJACに譲ったということで、四手井さんが桑原さんに、「腹を切れ」といわれたと聞きましたか？

西堀 反対する人は、当然あると思ってるし、若い人で反対もあるだろうけれども、これ、やりましょうというので方針を変えたのです。

山口 そのころはまだ、FFの名前でやったはったんですか？ 例えば、僕とか林さんとか伊藤洋平さんとかは入ってませんね。

西堀 戦争末期にJACの副会長をしたことがあって、私としては、計画をJACに持っていくということは、決してそう不自然なことではなかった。それで、マナスルのとき、私と木原さんが出かけていったけれども、交渉は主として私がやりました。そのとき、明らかに、慶応臭さがあったので、警戒は要すると思った。ともかく、イニシアチブをとって偵察隊とか、学術の面では釘をさした。しかし、隊員としてAACKの存在は、十分重視してもらいたいということをつけ加えたのは、慶応臭さが漂ってたからで、そういうことを無視されては困ると思ったからだ。

中尾 マナスル計画は、今から思うと、大変幸運だったと思うんだ。それは、木原さんがインドのコンGRESSに日本代表として選ばれたということが飛び込んできて、そして、西堀さんに行ってもらおうということは、もちろん、今西さんが考えたことで、そして、既に、毎日新聞というスポンサーがついていた。当時、外国へ行くなどということは、費用も手続きも大変だったが、毎日新聞がやってくれるというような、当時としては考えられない運のいい進行をしたといえる。もう一つ、運がよかつ

たのは、竹節さんの紹介のようなものにすぐ応えてくれたというクリシュナの人柄ですね。

西堀 それは、ラフルがいてくれなかったらやっとなかった。というのは、直接交渉したらあかんという先入観があったから。

中尾 今になったらよくわかるけれども、インドとのジョイントエクスペディションの交渉なんて、ものすごく難しいね。例えば、アッサムヒマラヤの交渉なんかは学術の手でアプローチしたけれども、全部ものにならないんだ。初めはいきそうにみえて、そのうち、途中でだめになっちゃう。最初に話すときは好意的で、見込みがあるなと思っていたら、そのうちに、壁にぶつかっちゃう。

西堀 インドというのはずるいというのか、複雑過ぎてわからん国ですな。それからみたら、ネパールというのは単純ばい。

中尾 インドがそういう国だということ知らなかったから、西堀さんがインド側と一生懸命交渉された。

西堀 ネパールは、インドに対しては日本に対する満州のような存在だと聞かされ、仮に満州に交渉しようとするれば、日本に対して知らん顔はできないということと同様に、インドを立てろといわれていた。そして、行ってみると、初めのうちはよくわからなかったが、ラフルが教えてくれた。そのラフルを紹介してくれたのが、ビスバスだった。ビスバスはカルカッタの植物園長で、木原先生の知り合いだった。

中尾 ビスバスは淡水藻類をやってきたんです。ガンジス川の水を浄化してカルカッタの町に給水する。その浄化槽の中の淡水藻類。

西堀 そこまではっきり覚えてないが、私が FF だということで、大変歓迎してくれた。そうでなかったら、あそこまでのいかなかったら。それから、ビスバスの線でヒマラヤンクラブのメンバーにさせていただいたのも、紹介者3人が必要だったのに、ビスバスがアレンジしてくれた。それに行ったとき、「General Itoはどうしているか」と聞かれたが、彼は私の前に会員になってたんだが、Gen Itoと書いてあるので、General Itoだと思っただけ。伊藤恩だとか FF だとか、いろいろなところでおもしろい効用があったものだ。だから、そういう意味で、ラフルの存在というものは、山登りに関して重要であった。

知床とアンナプルナ

岩坪 その後で、マナスルへAACKの若手は、ほとんど入れず、知床へ行って、その後、アンナプルナへ移っていくんですね。そのへんをお話ししていただきたいのですが。

藤平 知床という話を、最初に伊藤にしたのは私だと思う。そのころ、私の後輩の佐伯富男が北大にいて、「冬の知床というのは、誰もやってなくて、日本では最も極地に近い条件になるところだ」ということを聞いた。北大には、今、それをやる実力が無いという。福井にいたときだったかな、そのときに、伊藤と何かで会ったときに、「おい、知床をやらないか。北大が前から狙っているが、穴場じゃないか」とこういつたわけなんだ。齋藤 藤平さんは、知床の話をどこで注目したわけですか？

藤平 佐伯君の話で。

山口 僕も、三高で一緒やった井上から、北大は、冬はやり残しているということを知った。その前に、早稲田がペテガリに行ってるでしょ。北海道の冬で、まだ誰も行ってないところがあるということだった。

藤平 私は、ちょうどそのとき、小樽にいて、富男が北大にいたもんだから、遊びにきたんだ。その話を聞いた後、福井に転勤した。そのときに、何かで伊藤と会って話をしたんだ。震源地は北大だ。あんなことが京都においてわかるはずがない。

齋藤 『岳人』の5月号か6月号に、「知床というところがある。誰か注目しないか」という記事が載ったところがある。あれは、伊藤洋平さんが書いたんじゃないかなあ。へえ、そういうおもしろいところがあるんだなとそのことが頭にあるときに、伊藤洋平さんがルームにひょっこり現れて、「どうや、知床やらんか」といわれた。

藤平 筋道としては、大体、合っている。情報ソースは北大だということだ。

林 あのとときは、伊藤が隊長で、藤村が副隊長だったね。それは現役だったのか？

藤村 大学院だ。

林 それで、君らが現役だったのか？

齋藤 そうです。とにかく、その日に話を聞いて、皆でそれをやろうではないか、ということで、ワーッと拍手をして、あっという間に決まったことを覚えている。

山口 ただ、そのときの山岳部のリーダーのシャク（藤田）は反対だった。

齋藤 それは、伊藤洋平さん個人に対する強い反発だった。

山口 そのころ、マナスルのほうは、洋平さんは見込みがないようやけど、舟橋さんとか藤平さんは、隊員に選ばれるんやないかということがあったでしょ。そして、知床に行く前か帰ってからかに、舟橋さんやらも濡れたということで、林さんが、大層、憤慨したはった。

林 私が決まる前に、ほかの隊員は本決まりになってい

て、最後に、医者の問題が残っていたと記憶している。それで、裏工作があったかどうか知らんが、私が医者として決まった。伊藤にこれはえらい恨まれるなあという感じだった。

藤平 本隊では、京都が入る目は初めからないんだよ。実際のリーダーシップを握ったのは、谷口さんなんだ。慶応の。谷口さんはやはり後輩がかわいい。そこへ、京都勢がしゃしゃり出てきた。初めからお呼びじゃないということだ。その注文が逆に、アンナプルナのときにリアクションとなる。あのととき、金がなかったもんだから、BCのメステントが時間がなくて作れなかった。マナスルの本隊が帰ってきたときに、カトマンズにだいたい装備を残してきていて、そのメステントを借りようという話だった。東京のほうは私と舟橋君で、今西寿雄さんが出てこられて、その話をしようということで、楨さんのお宅、茅ヶ崎へ夜遅くに伺った。そうしたら、すぐ理事会に相談してみましようといわれて帰ってきた。終電にもう少し遅れるところで、楨さんの家から茅ヶ崎の駅まで走ったんだけど、距離が4キロほどあって、20分ほど走って、飛び乗ったんだ。今西さんは、楨さんがOKといったという形をとられて帰った。次の日か1日おいてか、私がAACK東京代表ということで、理事会に呼び出された。実は、その理事会の席上で、1時間半ほどの四面楚歌の猛烈なつり上げを食った。「大体、京都はけしからん。白紙委任といいながら、あの人事の巻き返しは何ごとか」と。「メステントは絶対に貸せない」と。「次も使うんだから、それまでに汚されては困る」と。ほとんど、面罵といっている調子で、1時間半、一人ずつ押し上げられたんですよ。

西堀 どんな連中だ？

藤平 爺さまがたですよ。中堅どころは黙っていた。僕も売り言葉に買い言葉でね、だいたいやり返した。ひょっとすると、楨さんに面と向かって、会長辞められたらどうですかといった覚えがある。ともかく、貸す気は一つもないわけだ。それで、帰ってきて、寿雄さんは結果が知りたいものだから、電話してくれといわれていて、電話をした。実は、だめだったんだ。僕も正直いって売り言葉に買い言葉で、それならいらんと啖呵を切ったという、「もういっぺん頭を下げてこい。間に合わんから謝ってこい」といわれた。わしは、もう二度と頭を下げる気はせんといっ、寿雄さんとも電話で喧嘩になった。それで、一計を案じて、ちょうど、福岡山の会があのととき、ヒマラヤへ行こうと、彼らは装備を作ってしまったいて、パーミッションが取れなくて、行けなくなってしまっていた。福岡の緒方君に電話をして、お前とこのメステントを貸してくれと頼んで貸してもらった。だから、

アンナプルナの写真を見ると、ベースキャンプのメステントには、「FY」と書いてある。ということで、そのときは、えらいひどい目に遭ったんだが、日本山岳会の中堅どころは、そこまでは思っていなかったんでしょがね。

岩坪 今西寿雄さんがアンナプルナの隊長になった経緯はどういうことでしょうか。

藤平 よく知らんのですが、ある程度、裏で筋書きを書いたのは洋平じゃないか。その前に、AACKか何かの会合が大阪であったんですよ。そのとき、今西寿雄さんが初めて出てこられて、その帰りに洋平が、「これはいい人がいるじゃないか。是非、寿雄さんを担ぎ出そうじゃないか」という話をした。当時、OBとの関係、南北朝の話でいい加減、嫌になっていたところで、京都在住のOBというのは、狷介不羈な人が多くて、一團一城の主が多過ぎてどうにもならなかった。一人の顔を立てれば、片方立たずということで、嫌になっていたところに出てきた今西寿雄さんという人は、そういう意味では違っていたんだ。こういう失礼ですが、リーダーらしいリーダーという感じがした。何かのときに担ぎ出そうという伊藤君の腹だったんです。私らもそれには全員賛成していた。

山口 AACKの会員は、マナスルでみんなシャットアウトになったんだけど、その前の段階で、マナスルの話は全部JACに持っていかうということになったので、それでは、AACKでどこかをやろうということになって、ある程度、鈴木信さんなんか中心になって、ワークマンの本などで、サルトロカンリなんかを考えていた。ところが、サルトロカンリはパキスタンの国の問題でだめだという話をしていた。そういう時期があったと思う。今西寿雄さんを上層部にプッシュしたのは、鈴木信さんというふうなことをご本人から聞きました。

藤平 確かに、鈴木さんはだいたい裏で力になっていたのは事実だ。それから、先ほどのJACで、もう一つ文句を食ったのは、中尾さんなんですよ。「なんでお前らアンナプルナⅡなんて考えたんだ」といわれたので、正直なところをいったんです。中尾さんの現地からの手紙で、アンナプルナⅡの南面はやれそうだという私信があったので、それで考えたのだといたら、「中尾佐助は不屈き至極だ。そういう報告を山岳会を差し置いて京都に知らせるとはもってのほかだ」と。そういう調子でつり上げだったんです。そういうのを1時間半もやられると、27、8の若いときですから頭に來ますよ。

中尾 「中尾の誤報」ということになっていますが、前年に北面を見るからねえ。南面でも、例の登れないところは前山で見えなかったんだ、雪煙が上がっていて。

あそこなら登れそうだという軽い気持ちで、向こうの山から見えましたという程度だったんだ。まさか、それで出てくるとは思わなかった。

岩坪 伊藤洋平さんというのは、すぐ下の一緒に山へ行った人たちは、すぐバテるとかいはりしますが、伊藤さんと直接交渉のない私などからみると、伊藤さんの将来に対する洞察力というのは、大変、優れていて、優秀な人であると思うんですが。

斎藤惇 戦略家ですな。

中尾 経過を見ていて、伊藤君が京都からヒマラヤへ行けなかったのは、実にかわいそうに感じた。いろいろと手を打ち奔走した仲間なんだ。僕はネパールへ続いて2回うまく出られたけれど、伊藤君はみんな外れてしまった。

藤平 伊藤君の最大の功績というのは、ヒマラヤというものを契機にして、離れていたOBと現役をくっつけたということですよ。

斎藤惇 私が覚えているのは、知床から帰ってきて、祝賀会をホテルニュー京都でやったとき、今西錦司さんが出てこられたんです。伊藤さんが、「今西さんなんて、これまで見向きもせんかった人が、知床が成功したから見直して出てこられた」といって、大変喜んでおられた。

林 ヨッペイの歌というのを、俺は後から聞かされた。

山口 あれは、知床でできたんですわ。

藤平 僕は、伊藤洋平とは一緒に剣へ登ったし、京都近郊の山も行ったし、アンナプルナへも登ったんで、いうと、高校時代はクライマーだっただろうけど、あのころは正直いって、皆さんの評価通りだったと思う。ただ彼の性格が誤解を受けて、そのへんがディスカウントされているという気がする。アンナプルナへ行ったとき、伊藤君が中間に配置されているということで、ものすごく安心感があった。僕らが思い切って突っ込むでしょ。伊藤君が第2か第3におってくれているということがものすごく安心感になっていた。いろんな事態に対して対応できる判断力を持っている。カーッとなって一直線に走らないという戦略的な力を持っているということね。

西堀 伊藤洋平という人は頭がいいというか、先見の明もあり、AACKに大きな貢献をしているということを感じてました。そして、彼を南極のメンバーに加えることを非常に積極的に考えていました。どうしてかという、山登りについては、いつも努力していながら加わられなかったことを感じてたから。そうしたら、船にものすごく弱くて、船にヨッペイ、だった。

林 彼は、僕がシアトルへ留学したときに、僕の書類を全部処理してくれた。一面リアルでありながら、一面浪花節的な友情というものを持っていた人だ。

中尾 FFの委員会を作ったときに、伊藤洋平の先生を委員にわざわざいれたんですよ、木村さんを。

藤平 山へ登るのに不便なのは、あいつは漬物とみそ汁が大嫌いだった。その当時、そんなものしかないですから、本当に困った。

西堀 南極へ行く船の中でも、いつでも話題の中心だった。

斎藤惇 そんなときでも、へこたれた顔をしはらへんでしょ。

平井 穂高の現役の合宿に入ってくれたし、冬の穂高にも入ってくれたし、それから、知床につないでいった。そのへんはかなり現役を意識していた。

斎藤惇 普通、あれだけ現役の前で、10歩行って休んだりしたら、それからは入らんもやけど。アンナプルナの隊員選考のとき、最初は投票しましたね。

藤平 外れとったのか？

山口 立候補者同士で投票したんです。そしたら、ザッカス、広瀬というところが上になって、ヨッペイさんは隊員の定員から、まだ後やったわけですわ。

斎藤惇 やっぱり、医者は要るということだね。

藤平 寿雄さんはね、『アンナプルナ日記』の最初の隊員紹介のところで、ヒマラヤ実現の功労者は彼だ、きっかけを作ったのは彼だ、とはっきり書いておられるんですよ。それは、もう最初から寿雄さんは入れるつもりだった。抜くつもりは全然ない。ああそうか、投票の結果というのは全然知らなかった。

平井 あのときは、新徳館で投票したんや。

南北朝

西堀 マナスルに登頂したとき、楨さんもよく、今西寿雄をやってくれたと思います。

中尾 やっぱり、楨さんに京都に顔をたてようという気があったんじゃないですか？

藤平 確かに、京都に対する顔だてはあったと思いますが、私は、もっと純粋にとりたい。あのとき、どうしてもここで成功させなきゃならん隊長の立場としては、それより先に、誰がベストかということを決めようと思うんだ。私だったら、絶対それをとる。

斎藤清 寿雄さんが圧倒的に強かったということでしょうね。

藤平 それは、寿雄さんは圧倒的に強いと思います。ギャルツェンと組ませて、しかも、確実に登れるといたら今西さんでしょう。加藤と組ませてやるかね。確実にとるなら今西さんをとる。あの前の年に、私と2人で剣に登ってるんですよ。黒部の下ノ廊下を登って、内蔵助へ上がって、剣へぬけたんです。その次の年に、マナス

ルへ行かれた。今西さんが先に音をあげられたのは、あのときが初めてだった。

林 アンナプルナで今西さんはどうですか？

藤平 強かった。はっきりいって、最後のアタックのときは、僕のほうがお荷物だった。もう少し上げられるのに、あそこでやめたのは私への配慮でした。帰りに落ちた回数、私のほうがはるかに多い。風で吹き飛ばされて。ただ、一番大きいスリップを止めたのは僕のほうです。40メートルほどすっ飛んだのはね。

中尾 もう1日天気がよかったら登ってただろうね。

藤平 あのときは正直いって、残念でしたという気持ちはなかった。それくらい、こてんぱんにいかれとったということでしょうな。

中尾 ティルマンでも尻尾巻いたんだから。

藤平 あのときに、藤村君には迂回ルートで荷物を輸送してもらった。まことに器用な芸当だったと思う。藤村君がうまく追いつくであろうという計算だった。大体、計算通りだったんだね。あれは初めての隊にしてはでき過ぎだったと思う。

中尾 あのときは、大四手井が準備にものすごく働いて、「こんな有能な人がいることがわかった」と木原先生がいった。

斎藤惇 鈴木信さんがずうっと詰めつきりで……。

林 要するに南朝の系列だな。

山口 アンナプルナのときは鈴木さんが、チョゴリザのときは近藤さんが中心にいった。

岩坪 近藤さんは、AACKが社団法人になるときに、事務局長としてもものすごく働かっただけですわ。

山口 その前から、チョゴリザの準備のときの事務局全部をやらはった。

斎藤惇 アンナプルナで、夏合宿を半分削って現役を動員した。

中尾 さっきの進々堂会談のとき、鈴木信さんは、梅棹や中尾がヒマラヤへ行くなると。

岩坪 私が1回生に入ったときには、山岳部にとってのええ方は四手井、鈴木、近藤という人たちで、今西、梅棹、中尾というのは、イケズの人たちというふうな雰囲気先輩から感じていました。

藤平 中尾、梅棹、川喜田という系列は、プロフェッショナルだという感じがした。最後は、山のことをうっちゃって、自分の学問のほうへ行くだろうという不信感が先にある。本質的には山屋でない。プロフェッショナルを持ってんだから、そっちへ動くと思っていた。実際にそうだったわけだけだね。

平井 僕らが山岳部へ入ったときには、伊藤洋平さんも何もかも知らん時代やった。それが、昭和25年の秋にカ

ギヤの2階に梅棹さんも中尾さんも鈴木さんも皆よって顔合わせしてくれた。そのときにリーダーやってた築山が、「私たちは天気図もとっているやってます」というたら、梅棹さんが、「そんなことは、僕ら現役のときには常識やったよ」てなことを、はっきりといわはったことを覚えてます。

中尾 川喜田や梅棹が、登山家に信用がなかったのは実に無理のないことなんだ。第1次マナスル登山隊のベースキャンプへ川喜田と2人で行ったときにね、ワヤワヤと話していると、上高地へ行ったことのないのは、川喜田二郎一人だけだった。別に、上高地がどうということはないんだけど。

まとまりだした戦後の京大山岳部

平井 僕は25年入学ですが、そのとき初めて、京大山岳部としてまとまったような、スタートしたような気がする。

山口 そうや。俺やらは造反しとったから、三高派は。俺は24年に入学して1年のときは、山岳部に入ってへんのか。25年に俺と広瀬と長谷川とが山岳部に入って、三高山岳部的な山登りを植え付けようというわけで入ったんや。

平井 それで、初めて、25年の真砂の合宿になったわけですか？

山口 そう。その前に24年の秋に、冠山の遭難があって、救援を頼まれて、広瀬と一緒にいった覚えがある。

平井 ゴチャゴチャしてたんが、なんで25年にまとまったんですか？

山口 それまでは、部員の数が少なかった。

藤村 25年にむちゃくちゃ増えた。

林 藤村がリーダーになった、25年からまとまりだした。藤村の影響力は、実に大きかったと思う。京大山岳部の歴史の中で実に残念なことは、藤村がアンナプルナでポショッと消えてしまったことだ。このことは、特に、私が発言したということ覚えておいてもらいたい。

平井 そらそうですよ。林さんはミリタリズムでね。私みたいな小さなもの、弱いものは、早く辞めさせると、はっきりいわれた。藤村御大は、ちゃんと頑張っとなのやから置いとことね。だから、林さんのあれやったら、僕やショウちゃんはなかった。

斎藤惇 今の平井もクーラカンリもなかった。

酒井 『京大山岳部時報1950』（報告第1号）によると、学制の改革で新制度になって、人数が増えたので活動が盛んになったというふうに受け取れます。

平井 25年というのは、旧制の最後の入学なんです。藤田陸奥麿や吉村クモスケというのは、旧制の最後で入っ

てきた。

齋藤 僕は新制第1回、24年。

山口 Yは旧制高校からやし、ズブの新制というのはポコが最初やな。

藤村 今までの話の中の、藤平、林、伊藤というのは高等学校の山岳部で活躍しておられた。一つの修業が済んでられたわけだけれども、25年にポコたちが入ってきたときには、初めてのものばかりで、そこで、大きく変わった。

岩坪 私が1回生に入ってきたときに聞いた話では、山岳部が今のようになったのは、藤村御大というものすごく偉いリーダーがおって、その人が頑張って、今のようになったんだと。それまでは、林さんみたいな人がリーダーでと。

酒井 怖いだけで……。新人をうまくトレーニングするような人は、もうちょっと後からだ。

山口 それはねえ、ちょっと戦後の空白的なあれがあるわけや。林さんやらまでは高等学校で山へ行ってる。藤村も岐阜で山へ行ってたけど。藤村や僕が入ったところというのは、山岳部へ入ってきて途中で辞めてしまった人がいるんやけど、そういう人は、旧制高校でも山へ行てなかった人でそういう落ち込んだ時期が1、2年あったんや。

藤村 それを、僕らがつないだんやと思うわ。藤平、伊藤、林という大変なベテランがいらして、僕らは直接指導を受けた。今まで登山歩きばかりしてたんが、岩登りとかいろいろね。それを、全くの新人が入ってきて、それをつないだんやという、そういう時代やったと思う。そのころ、オールラウンドでコンプリートとって。23、24年が落ち込んでたんやね。

山口 僕と同じ学年で、高校で山行ってたんいうたら、俺と築山だけなんや。藤村の年やったら藤村だけやろ。

藤村 それと伊谷がおった。

山口 伊谷は山岳部に入ってたけど、全然活動してなかった。

藤村 そやけど探検的なことで、僕らの時代の代表やったと思う。

林 藤村の次が築山か？

山口 そう。その次がシャク。シャク、ジャン、ザッカスは一緒。その次がYやらやけど、山岳部に入った年次は一緒ですわ。新制と旧制が一緒に入ったから。

平井 ザッカスは、僕と一緒に入ってきたけれど山岳部入ったんは1年後。

齋藤 シャクの次には、中島がリーダーになっとなった。

藤平 ザッカスというのは、どこかでえらい迂回をして

きたわけだな。あれは俺と1つしか違わない。

山口 ザッカスは僕と一緒に、僕が3年遅れてるのにあいつはもう1年遅れてる。

平井 海兵から来て、1年、先生をしとった。

齋藤 藤村さんの力も大変大きかったと思いますが、三高山岳部がうまいことスツといったのは、山口と広瀬の人格やと思います。

藤平 そこで、へたらずに成功したというのは大きい。

山口 なりかけたことがあったんですよ。山岳部があって、スキー山岳部があって、広瀬やらの旧制高等学校1年がなくなったときに、旅行部いうのを復活しようというので、教養のところに張り紙をした。24年。鈴木さんやらの相談で、一回やってみたらどうかいうのでね。そのとき、林さんや藤村が、そんなこといわずに一緒にやったらどうやとそういう話し合いが、一度、旧三高のルームであって、それなら考えてみようということ。三高のルームというのは、ポコのころもあって、今のテニスコートで、昔の南グラウンドの北側にあった。松の木が目印で。

林 南北朝の話の前に、そういう話があった。山口がおらんかったら、鈴木信とも話し合いはできとらんし、川喜田さんや梅棹さんや、ひいては、今西さんとも全く別のものになってたかもしれん。中興の士は、山口ということだ。

齋藤 末包さんがリードしてたら、絶対一緒になってない。

林 あれはすごかった。

山口 そのことについては、今の話と直接関係はないが、少しトラブルがあった。京大山岳部が剣に行くというので、テントやアイゼンを三高山岳部が京大山岳部に貸した。赤谷山から剣北部をやるというので。あれ、林さん覚えてたらへんか？ そしたら、テントを燃やさした。それに、アイゼンやグラウンドシートを全然返さへんかった。

林 それは、岡本とか、毛利とかに聞いてみる。

山口 そうそう、毛利さんも来てはった。それで、三高山岳部が京大山岳部を三高のルームへ呼びつけた。そのときに、末包が「いくら学生といえども社会人としての認識がないのか」ってどやしつけるように怒った。そのとき、林さんが怖い反抗的な目で末包をにらみつけはったんを覚えてますわ。僕は、その後、舟橋さんの吉田山の西側のお寺みたいなところの下宿にアイゼン返してくれという何回も行った。そういうことで、わだかまりがあって、すぐに京大山岳部に入る気がしなかった。末包は、結局、入っていない。初めて僕と広瀬と長谷川が入った。

林 その事実は全く記憶にない。

岩坪 それは、京大山岳部が火事いくのとどっちが先ですか？

山口 火事はその後や。

林 三高が燃やしちゃったんちがうか。

藤平 いつごろだ。私たちが剣へ行ったときは、全然借りていない。

山口 その後でしょ。毛利さんがおった。舟橋さんもからんですよ。それで、まだ燃える前の西部食堂の西の京大山岳部ボックスへ催促に1、2回行ったことがある。たくさん本があるなあ思て、感心した。私が三高の山岳部にいたころだ。昭和21年のころで、当時は、旅行部はなかった。

伊藤 そのころ、旧制三高、旧制京大、新制京大というのはどういうふうか？

平井 新制京大が発足したのが、昭和24年や。旧制三高がなくなったのは、25年3月。旧制は、25年で全部なくなった。

齋藤 僕らの学年は、1年しか旧制高校へ行かなかった。すぐ、新制大学が発足して、また、試験を受けた。

アンナプルナ以後

岩坪 今までの話で、アンナプルナまでは済みました。その後、山口さんやザッカスたちがいろいろと活動することになるのですが、そのあたりを、まとめてみますと、1955年、KUSEのカラコルムヒンズークンで、56年に藤田和夫隊長で、その前年にできた探検部から本多、吉場がパキスタンへ行きまして、57年に松下進さんが隊長で、本多、荻野、私、沖津がスワートへ行きまして、58年にやっとチョゴリザ。そのあたり、アンナプルナから帰ってきてからどうだったんですか？ マナスルが成功するのは、56年ですね。

山口 林さんがそのころは、だいぶ関与したはって、西ネのカンジロバヒマール、ダウラギリⅣ、シスネヒマールとかね。南極の話もからんでくる。まあ、暗黒時代やないけど、いうていくと全部蹴られて。一つはアンナプルナがあかんかって、京大山岳部が信用をなくして、そのころ、スポンサーとして新聞社しか考えられへんかった。そのスポンサーに皆蹴られた。

林 山口は、カンジロバヒマールなどを一生懸命、いていたが、結局、だめだった。そういうのが大変ショックだったけれども、今西寿雄さんや藤平さんは、帰ってきたら、その後、何もしないじゃないかという気持ちがあった。

藤平 私にしても今西寿雄さんにしても京都を離れてた。それが一番の障害になった。もう一つは、アンナプルナ

が赤字だった。

近藤 そうや。赤字の始末で苦労した。川崎重工へボンベの謝りにいったら、不良取引のはんこを押したのを見せられた。

藤平 未払いが残ったし、カルカッタで借金してきてるし。大半は、まあ、今西さんが被られたんでしょやけど。

近藤 木原さんがちょっと出してくれはった。

藤平 私も、なけなしのところに被ってるんです。何年間か、ボーナスが一銭も家に入っていない。幸いにして、女房の家が自由業だったので、ボーナスの存在を知らなかった。そのうち、社宅住まいだったので、近所の奥さんがたから聞いて、ボーナスの存在を知ったわけだ。3年間ほど入っていない。アンナプルナは、全部調達する前に行ってしまったから、帰ってきてから、後始末のために金くれとはいえなかった。だから、チョゴリザのときは、是が非でも登らんと、またえらいことになると思った。

林 アンナプルナの後遺症が、チョゴリザまで残ったんだな。

中尾 今西寿雄にチョオユーを薦めたけど、彼はどうしても動かなかった。

近藤 南北朝の始まりというのは、そのころちがうか？

齋藤 KUSEのとき。

近藤 四手井さんは反対やった。

中尾 AACKとFFが大対決して、FFはAACKを切って……。

平井 加藤泰安さんが外れたんは、そのせいですか。輸送係で入ってたでしょ。

岩坪 KUSEは、京都大学主催になっていたの、教官にできない人は切らざるを得なかったのでは？

山口 僕が覚えているのは、京園でね、AACKを切るいうので、今西さんと四手井さんが両方も角突き合わせてやらはって、間に入って並河先生がおろおろして困ってはった。

岩坪 あのころは、今の海外科研というシステムはなかったけれども、費用を文部省からもらって、京都大学に実行委員会を作ったのあれですから、そういう人は事務手続きで入れようがなかった。梅棹さんも京都大学の非常勤講師にした。

中尾 井上靖が行きたいといっていたんだけど、これは不調になった。泰安と2人で話にいったんだけど。

岩坪 あれがもしも、アンナプルナのときのように、一般募金で成立していたら、山派の大勢も入っていたでしょう。

中尾 あれは、朝日新聞がスポンサーになったような形になってるけれど、文部省が国費を探検に支出した最初だった。それから、南極という大物が出てくるわけだ。

近藤 南極から帰らはるとき、船の中から西堀さんが桑原さんに電報を打たはった。あのころ、鈴木さんはムツートととった。

岩坪 そのころ、山口さんは南極へ行こうと頑張ったはったわけですね。

山口 そうや。

平井 わしもそうやった。

山口 それで乗鞍まで行った。僕、川口、北村、平井。ヒマラヤは行き詰まった。

西堀 東京の空気は、先ほどのマナスルの話もあって、なかなか深刻ですよ。そこに日本の宿命があるのかもしれない、東京と京都という。後で私が進言するまでは、越冬ということは考えさせてもらえなかった。

平井 どうして、AACKは、もっと人を送れなかったかなあという気がする。

西堀 ほんの数人入れるだけで、精一杯だったんだ。

藤平 南極のときは、振り切れなかったね。あのとき、私は会社を辞めなければ行けない立場で、ヤクザな道に入るか、プロフェッショナルに進むかという選択だった。

岩坪 南極へ行って、みごとに転身しやはったんは、伊藤洋平さんやね。あれで、山はやめて、学の道でいこうと。

斎藤 倅 スパッと、そこで足を洗ったね。

西堀 いいや、船酔いがひどかったんや。

藤平 船自体が貧弱やったね。出発のとき、西堀さんの奥さんに、「大丈夫かしら。心配だわ」などといわれて、弱った。

西堀 確かに、今とは雲泥の差だ。

ヒマラヤ遠征の裏話

岩坪 南極と同時に、チョゴリザの話が出てくるんですね。私が、1957年にスワートへ行き、カラチへ帰ってきたら、日本大使館で、加藤泰安隊長のアプリケーションが来てまして、これははよ帰って、これに寄せてもらおうと心に決めて、帰ってきたんです。

山口 泰安隊長でチョゴリザへアプリケーションを出してたけども、ちょっとも返事が来んので、もしも、ということで、川喜田さんの西ネパールの計画に合体して、俺やらは、山へ登ろ、ということで、進々堂で話してたんですわ。

岩坪 進々堂で今西錦司さんが、かなり私にしゃべらしてから、ポットポケットからチョゴリザの許可書を出さはったんや。AACKの会長は桑原さんで、ヒマラヤ委員会の委員長が今西さんで、さんざんしゃべらして、山口さんやらがブスッとしてから、実はな、いうて許可出してきはって、相変わらずずるこい人やなあと思た。

平井 なんで、サルトロカンリの名前は出てこなかったんですか？

山口 難しいということと、峠を越えんなんから。

平井 アンナプルナからKUSEまで、チョゴリザの「チョ」の字も出なかったし、許可が来て、初めてチョゴリザの名前を認識したんですけど……。

山口 それは、カラコルムに入れるようになってきたからやんか。

斎藤 誰もチョゴリザを見てなかったんですか？

山口 そうや。でも、立派な写真あるからなあ。

中尾 FF育ちの僕から見ると、ネパールもカラコルムもFFが開いたね。

藤平 初め、チョゴリザなんて興味がなかったね。ダウラギリIをやりたくてしょうがなかった。あれは登れると確信もってたから。8000の中では、ダウラギリはやれると思ってた。

平井 チョゴリザの帰り、スカルドで、サルトロカンリへ偵察に出かけるかという話があって……。

岩坪 なぜ、それをしてこなかったかいうて、帰ってからの座談会で梅棹さんやらにえらい文句いわれたんとちごたんですか？

平井 しかし、あのとき、泰安さんが、「行きたいとこ紙に書いて出せ」といわれても、皆口でいうてるだけやったから。

山口 いやいや、そんなことあらへんよ。スカルドで、だいぶ粘ったんよ。俺とザッカスとサルトロの偵察に行かせいうて。そしたら、桑さんと泰安さんが、俺が休職で行ってる状態やから、はよ帰れいわれたんや。

平井 ザッカスは、「君は病気が、まだ治ってないから、病院のあるところでないとダメだ」と泰安さんにいわれた。

岩坪 59年は行かへんのですけど、ノジャックの準備を始めるわけですね。

平井 サルトロの許可が来んから。マライニがノジャックという山を見つけて、前の年にそのへんに入ったという情報があって、電報で登ったかどうか聞いたら、登ってませんと。

近藤 ノジャック前にサルトロの募金を始めてて、吉井さんから、回せ回せとやかましくいわれた。

斎藤 ノジャックは、オシメさんやったか？

山口 ノジャックは、オシメさんのかなりの執念で成立したんや。

岩坪 オシメさんは、チョゴリザに行けなかって、どうしても次は行くぞ、いうて頑張ったはったわけです。チョゴリザのときに、私は食糧係で、オシメさんにえらい世話になったんで、ノジャックのときは、わりかし頑張

るわけです。

平井 ノジャックは、山日記の山の一覧に、「未踏」で出てたんを見つけたんや。あれは偵察で、次の年に本隊出すつもりやったんやね。

斎藤 本隊の候補者は？

山口 行きたいのは、あのころはいっぱいおった。決まっていたはなかったけど……。

平井 チョゴリザの登攀隊長は、初め、ザッカスやったんやけど、ザッカスではちょっとしんどい、いうんで、藤平さんをお願いした。8月ごろやったな。

岩坪 ザッカスは一生懸命にやりよんのやけど、上の人には、「あれは、頼りない」と思われとった。会議のときに遅れてくるとか……。

近藤 アンナプルナのときも、あんまり評判よくなかった。

岩坪 ザッカスは、洋平さんと反対に、下のものには大変うけがよかったけど、先輩たちにウサン臭がられてた。

藤平 アンナプルナのとき、意外にもろいという気がしたんだね。アンラッキーな男やった。

林 あいつは雑いからね。五郎とか、ポコみたいな子分がついていて、初めて役に立つ。

平井 山口さんとペアになってたんやね。

山口 そやけど、チョゴリザの準備のときは、ようやりおうてた。お互い、いいたいこというてても、こいつはこういうやつということが、互いにわかってたからね。キャラバン中でも、しょっちゅう、いい合いしてた。泰安さんと桑さんが、大変心配しはって、別々に歩かしてはった。

林 アンナプルナのときなど、安田武君にテントに関して、かなり世話になったね。チョゴリザのときもか？

岩坪 安田さんは、アンナプルナの装備がよくなかったということが原点があって、チョゴリザ、サルトロと続いている。ナムナニもブータンのマサコンも世話になっているんですよ。常に、アンナプルナのジェットストリームが頭の中にあるんですよ。植村直己は、「安田さんの作ってくれた装備が、最後には頼りになる」というていた。

林 安田というのは、特筆すべきだ。

ヤルンカンを見つけた中尾佐助

平井 サルトロの次に、なんで、ヤルンカンということですが、中尾先生が、「AACKは、情報を得るのをサボっている」とおっしゃった。

中尾 私が、カンチの辺りに、大阪府立大学の連中を偵察に派遣して、対面の山へ登って、写真を撮ってこさせた。その写真をもとに、大阪府大が力不足でできんということ、AACKに持ってきたんだ。

平井 ほんで私が最初からやってたんやね。

岩坪 初めは、サウスもウエストも両方やろうという話やったんやね。

平井 すぐに許可が来たけれど、インドから横やりが入って、即、とりやめになって、舟橋さんが交渉に行かはった。なぜあかんかと聞くと、カンチェンジュンガという名前がいかにというので、中尾先生の案で、ヤルン氷河の源頭にあるのでヤルンカンという名前で出しましょうということになって、それでアプリケーションを出して、それでもらちがあかんの、ジャンとランプが登場するんや。

中尾 クリシュナがね、今西寿雄と飯食ってるときに、こっちのインチキを見透かしたように、「ヤルンカンなんて名前はなし」なんていって、僕はね、このやろう、俺があそこへ行って調べたんだ、といったんだ。ヤルンカンを知らんのは、お前の無知なんだって、猛然とやったんだ。それで最後に、許可書来たでしょう。シッキム側もいかにってたね。インドの政府も、その後でひっくり返してだましてやろうと考えていた。

岩坪 とにかく、ヤルンカンという名は消えない。

平井 ヒマラヤンジャーナルもそうになっている。命名者は中尾さんやけど、公式には、住民に聞いたことになっている。

中尾 クーラカンリにしても、マサコンにしてもいい山だが、それも僕が薦めてたんだ。

岩坪 中尾さんの功績は大ですな。ブータンまで来たところで、それでは、これで終わらせていただきます。

中尾 クーラカンリにしても、マサコンにしてもいい山だが、それも僕が薦めてたんだ。

岩坪 中尾さんの功績は大ですな。ブータンまで来たところで、それでは、これで終わらせていただきます。

中尾 クーラカンリにしても、マサコンにしてもいい山だが、それも僕が薦めてたんだ。

林 安田というのは、特筆すべきだ。 (編集：斎藤清明)